

Bulletin of the Kyushu University Museum



Siebold 'NIPPON' アイヌのイオマンテ

January 2007

The Kyushu University Museum

Bulletin of the Kyushu University Museum



January 2007
Number 5

C o n t e n t s

Katsunori MIYAZAKI _____ 1

The Study of Comparing Color Prints in Siebold 'NIPPON'

Misako MISHIMA and Junichi YUKAWA _____ 57

Dimorphism of Leaf Galls Induced by *Pseudasphondylia neolitseae*
(Diptera: Cecidomyiidae) on *Neolitsea sericea* (Lauraceae) and Their
Distributional Patterns in Kyushu, Japan



The Kyushu University Museum

Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka 812-8581, Japan <http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/>



シーボルト『NIPPON』の色つき図版

宮崎克則

The Study of Comparing Color Prints in Siebold 'NIPPON' Katsunori MIYAZAKI

九州大学総合研究博物館：〒 812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1
The Kyushu University Museum : Hakozaki6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka, 812-8581 Japan

はじめに

シーボルトは日本追放となってオランダへ帰り着き、2年後の1832年に36歳で『NIPPON』を刊行し始める。1851年までの約20年間に20分冊を13回に分けて自費出版した。13回の配本のうちには合併号・合併配本などがあり、決して一様でないが、1分冊につき図版17～20枚、そのうち2～3枚の色つき図版を配った(1)。

『NIPPON』に掲載された図版数は367枚。当時の日本の風景・風習・人物・産業・地図情報などがふんだんに盛り込まれている。これらの図版は、川原慶賀の絵をもとにしたり、他の資料に基づきオランダの画家たちによって石版画に描かれた。図版の右下、あるいは左下に極めて細かな文字で彼らの名前が記されている。それらの図版のうち、47枚に彩色がある。色ムラがあることから、色刷りでなく手彩色だということがわかる。

国内を中心に『NIPPON』を調査していくなかで、色つき図版にバリエーションがあることがわかってきた。これは今だからわかることで、出版当時の購入者たちにはわからなかったと思われる。『NIPPON』の作成・出版については、ライデンのラ・ラウが印刷したことは内表紙に記されているものの、彩色はどのように行ったのか、その費用はどれほどだったかなど、具体的な記録は多くない。そこ

で、現存する『NIPPON』を比較することによって、また、ほぼ同時期に自費出版した『日本植物誌』『日本動物誌』とも比べることによって、シーボルトの著作出版に対する方針を明らかにしていこう。

ここで使用する図版は、九州大学附属図書館医学分館が所蔵する初版・未製本の『NIPPON』(大正15年、医学部法医学教室購入、代金3000円)と、シーボルトの死後に在庫を買い取ったクオリッチによって販売された『NIPPON』(福岡県立図書館所蔵、大正7年購入、『日本植物誌』『日本動物誌』等を含めて代金4000円)を中心に、廉価版の色なし版を所蔵するシーボルト記念館本や他機関の『NIPPON』を参照していく。

〔注〕

(1) 拙稿「シーボルト『NIPPON』の配本」(『九州大学総合研究博物館研究報告』3号、2005年)。

1.クオリッチ版『NIPPON』

シーボルトは1866年10月にミュンヘンで死去し、『NIPPON』などの在庫は夫人によって1868年に処分された。それがロンドンで古書店を営むクオリッチに渡り販売された。在庫であるから、本文・図版ともに初版本と同じ紙であり、ファン・ヘルダー社の透かしである「VANGELDER」あるいは「VG」のWatermarkがあるが、初版本と異なる特徴も備えており、ここではクオリッチ版と呼ぶことにする。



九大本 透かし

シーボルトの最晩年については、フランスの作家・ドーデの『月曜物語』(1)に記されている。これは40余の短編集であり、最後の「盲目の皇帝」がシーボルトとの交流を記している。両者が交流することになったのは、1865年、シーボルトが日仏貿易会社と商工学校を日本に建設することをフランス皇帝ナポレオン3世へ建議したことにある。シーボルトのフランス語を訂正したのがドーデであった。シーボルトはその返礼として「盲目の皇帝」と題する「十六世紀の日本の悲劇」を送ることを約束した。「盲目の皇帝」とは、第1次来日時における江戸参府の帰路、大坂の角座でシーボルトが観た歌舞伎「妹背山女庭訓いもせやまおんなていきん」のことである。例示した「シーボルト観劇図」は、その時の様子を讃岐象頭山参詣から帰る鶴袋が描いたものである。中央は捻挫した商館長スチュルレル、右側がビュルゲル、左側がシーボルトである。シーボルトは、その『日記』(2)に長々とストーリーを記し、絵番付も持ち帰っていた。彼はこれを歌

シーボルト観劇図



国立国会図書館蔵、紙本着色、27.0×39.5cm

曲にしようと考え、ドイツの友人で歌劇作家マイエルベールのために翻訳した。しかしマイエルベールが作曲中に死去したため、そのままとなっていた。

シーボルトによるフランスへの献策は成功するかに見えたが、普墺戦争が起り、フランスは総力を欧州政治に集中しなければならず、シーボルトの計画は棚上げとなった。彼は1866年にドイツのビュルツブルクへ帰り、すぐにミュンヘンへ移った。バイエルン政府がシーボルト再来日時^のの収集品を購入して民族学博物館を開設することになったからであり、シーボルトは収集品整理のために北の王宮庭園にある博物館へ通っていた。そこへドーデがやってくる。シーボルトから日本の話を聞き、興味をもったドーデは、戦争中にもかかわらず、ミュンヘンを訪れ、シーボルトに再会した。しかし「盲目の皇帝」はミュンヘンにはなく、ビュルツブルクのシーボルト夫人の手許にあった。シーボルト夫人からの郵送を待つこと10日ばかり、ある夕方シーボルトは顔を輝かせて「例のが手に入ったぞ!」「明日の朝 博物館へ来たまえ、一緒に読もう。そりゃあ君素晴らしいぜ」といい、とても元気だった。翌朝、ドーデが博物館に行くと、前夜(1866年10月18日)にシーボルトは敗血症のために70年9ヶ月の生涯を閉じていた。結局、「盲目の皇帝」を見ることのできなかったドーデは、「私は最後まで、日本の素晴らしい悲劇の題だけしか知らなかった」という。

シーボルトの遺骸はミュンヘンのタール教会通りの南旧墓地に埋葬され、墓が建立された。その後、彼の未亡人は1868年5月に息子2人・娘2人とともにビュルツブルクからヴァイスバーデンに移った。その際、彼女は夫の文庫の処理を書籍商に委ねた。ハンス・ケルナー『シーボルト父子伝』(3)によると、その重さは85ツェントナー(1ツェントナーは50kg)あった。この男は『日本植物誌』と『NIPPON』の数部を古本屋に、またほぼ20ツェントナーを反故紙として商人に売り、本の一部を着服した。彼は逮捕され、ミュンヘンの地方裁判所より5ヶ月の懲役に処せられた、という。

これにある古本屋がクオリッチであったかどうか不明ながら、クオリッチ社の在庫記録には、『日本植物誌』『日本動物誌』などを1868年5月に購入したことが記されている。『NIPPON』についての記録は見あたらないものの、クオ

ただし、シーボルトの『NIPPON』は完結しておらず、未完成であり、しかも分冊で通しのページ番号や全体の目次もなく、図版・本文ともに1枚1枚バラバラの状態だった。その状態で『NIPPON』を買い取ったクオリッチはこれを整理し、各章節の構成・配列を示した校合メモ(Collation)を英語で作成した。3ページの「Collation」は『NIPPON』と別売りであったから、これを含まないクオリッチ版『NIPPON』も現存している。「Collation」末尾の注記には、ミュンヘンからロンドンに移送されたこと、タイトル頁を印刷し、「Collation」とともに販売していることを記し、「1869」の年号が付されている。ここでは、赤坂(東京)にあるドイツ東洋文化研究協会(OAG)が1873年に購入したクオリッチ版『NIPPON』を掲載している。社団法人・ドイツ東洋文化研究協会は、日本を研究し、ドイツ語圏の国々に日本を紹介することを主要な目的として、1873年(明治6)に在日ドイツ人の集まりを母体として東京で設立された組織であり、設立と同時に『NIPPON』を購入している(クオリッチは、横浜・シドニー・ニューヨーク等で競売に付するためにロンドンから本を輸出していた)。

クオリッチ社の在庫記録を調査された佐藤 図氏(5)は、クオリッチ「Collation」は1851年の20分冊までに発行されたなかった「琉球諸島」の部分も含めており、『NIPPON』を最初に整理した文献として高く評価している。クオリッチ社には『NIPPON』以外のシーボルト著作の記録はあるものの、『NIPPON』に関する在庫記録はなく、どのように販売されたのか、どれほどの「完全本」を持ち、どれほどの「不完全本」を抱えていたのかなど、詳細は不明であるという。

これまでの調査範囲であるが、クオリッチ版『NIPPON』を所蔵する機関名をあげておこう。その前に、『NIPPON』に使用された紙型について述べておく。図版には大判と小判があり、大判は2折判・小判は4折判である。ファン・ヘルダー社から購入された紙の大きさは縦59.5cm×横79.0cmであり、大きな地図などはそのまま印刷されたが、通常の図版はそれを縦に半切して印刷された。これが2折判(縦59.5cm×横39.5cm)の図版である。肉眼で見ると1辺に切断した跡を確認できる。さらにその紙を横に半切して4折判(縦39.5cm×横29.25cm)ができる。数点の図版を除き、同じ石版で2折判・4折判ともに印刷されて

おり、余白が違うのみである。値段も違った。2折判は色つきの豪華版(308ターラー)であり、4折判は色なしの廉価版(187ターラー)であった(当時の平均的な労働者の年収は120~160ターラー)(6)。

本文編は、図版よりも薄いファン・ヘルダー社の紙を使用し、2折判の紙に両面印刷した。これを半分に折りたたむから、大きさは4折判と同じになる。したがって、廉価版では関連する本文と図版を交互に組み合わせ、数冊に分けて製本されている場合が多いのに対し、豪華版は図版と本文で判型が違うので、図版2冊・本文3冊というように別々に製本されている場合が多い。

【クオリッチ版『NIPPON』所蔵機関】

OAG(ドイツ東洋文化研究協会)

2折判(大判)彩色 図版2冊・本文3冊
クオリッチ「Collation」あり

永青文庫

2折判(大判)彩色 図版2冊・本文3冊
クオリッチ「Collation」なし

東洋文庫

4折判(小判)彩色 図版・本文合冊6冊
クオリッチ「Collation」あり

(4折判(小判)の『NIPPON』に彩色はないが、ここでは彩色されている。しかしこれは当初からの彩色でなく、製本後に彩色されたものであり、旧蔵者のアーネスト・サトウによって色が塗られたと考えられる。上手な彩色もあるが、多くは下手である)

神戸市立博物館

a)4折判(小判)色なし 図版1冊(本文なし)
クオリッチ「Collation」あり

b)2折判(大判)彩色 図版2冊(本文なし)
クオリッチ「Collation」なし

天理大学附属天理図書館

a)2折判(大判)彩色(291-08-4.110 与路津代文庫) 図版2冊(本文なし) クオリッチ「Collation」なし

b)2折判(大判)彩色(291-08-4.36) 図版2冊(本文なし)
クオリッチ「Collation」なし

c)2折判(大判)彩色(291-08-4.38) 図版2冊(本文なし)
クオリッチ「Collation」なし

東京大学総合図書館

2折判(大判)彩色(エリオット文庫 A.100.324) 図版2冊・本

文2冊 クォリッチ「Collation」なし

福岡県立図書館

2折判(大判)彩色 図版2冊・本文3冊

クォリッチ「Collation」あり

オックスフォード大学ボドリアン図書館

2折判(大判)彩色 図版2冊・本文1冊

クォリッチ「Collation」あり

クォリッチ「Collation」は本文編の最初に挿入されるから、2折判の図版のみである天理図書館・神戸市立博物館本に含まれていないのは当然であるが、本文編のある永青文庫・東大総合図書館本にも含まれていない。これは「Collation」が別売りだったことによる。したがって、「Collation」の有無はクォリッチ版であるかどうかの決め手にはならない(ここであげたクォリッチ版の装丁は、同一でなく、まちまちで、マーブルも有るなしがあり、客の注文に応じて製本・販売された可能性がある)。

今回、クォリッチ版と判断した根拠は内表紙にある。初版本にない「1852」年と明記された内表紙がすべてに付いている。これは、ファン・ヘルダー社の紙と明らかに異なる紙であり、手で触るとすぐにわかる。「1852」年の刊期はクォリッチが付したものであり、実際の『NIPPON』刊期とは関係ない。

分冊で出た『NIPPON』の刊行は、第1回配本が1832年、13回配本が1851年であり、その後1858～59年頃に「琉球諸島」等に関する部分が出たという(7)。「琉球諸島」を含むのはクォリッチ版であり、初版本には見あたらないようである。この他に「京都の全景」・「江戸の全景」の図版もクォリッチ版のみ含まれている。断定はできないが、「琉球諸島」や京・江戸図は印刷されていたものの、配本されずにシーボルトの手許に残され、在庫を買い取ったクォリッチによって初めて売り出された可能性がある。クォリッチ版の内表紙にある「1852」年は混乱を引き起こしており、これを所蔵する機関の目録等では、1852年に『NIPPON』が刊行されたことになっている。

どのように内表紙が違うのか、初版・クォリッチ版・1930-31年のベルリン日本学会(編者:トラウツ)復刻版・1975年の講談社復刻版を並べてみる。第1回配本で出た本文編の内表紙に似せる形で、クォリッチの内表紙が作られ、さらにベルリン日本学会・講談社の内表紙が作られてきていることがわかっていく。クォリッチの内表紙は本文と図版

編で点線の箇所のタイトル部分が変わるが、ともに1852年にライデンで出版されたようになっている。繰り返すが、誤りである。

最後に初版本を所蔵する機関名もあげおこう(現在までの調査範囲)。

【初版『NIPPON』所蔵機関】

九州大学附属図書館医学分館

2折判(大判)彩色 未製本 図版14冊・本文12冊

近畿大学図書館

2折判(大判)彩色 未製本 図版5冊・本文6冊(欠多し)

武田科学振興財団 杏雨書屋

2折判(大判)彩色 未製本 図版3冊(54枚のみ)・本文3冊(欠多し)

慶応義塾大学三田メディアセンター

2折判(大判)彩色 図版2冊・本文2冊

国立国会図書館

4折判(小判)色なし 図版・本文合冊3冊(アイヌの絵はなし)

天理大学附属天理図書館

4折判(小判)色なし(291-08-4.110与路津代文庫) 図版・本文合冊4冊(トラウツの手紙あり)

長崎県立図書館(現:長崎歴史文化博物館)

2折判(大判)彩色 図版6冊・本文2冊(「千字文」・「類合」のみ)

シーボルト記念館

4折判(小判)色なし 図版・本文合冊4冊

大英図書館

2折判(大判)彩色 図版7冊・本文3冊

ケンブリッジ大学図書館

4折判(小判)色なし 図版・本文合冊7冊

ブランデンシュタイン城

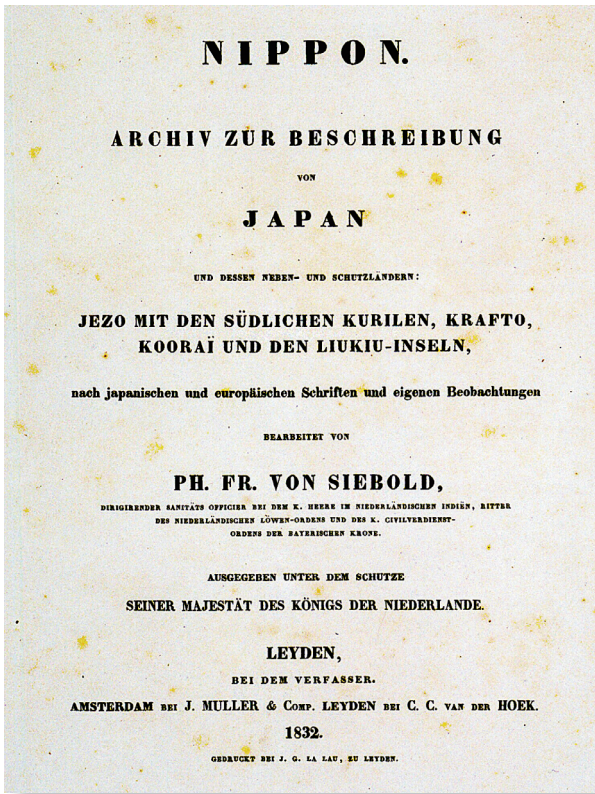
a) 4折判(小判)色なし 図版2冊・本文2冊

b) 2折判(大判)彩色 未製本 図版9冊

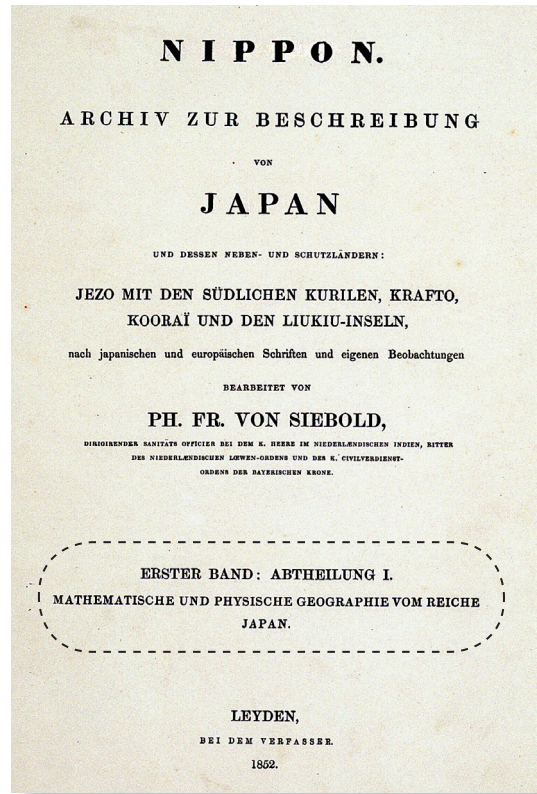
〔注〕

- (1) ドーデー(櫻田 佐訳)『月曜物語』、岩波書店、1936年。
- (2) 齊藤信訳「シーボルト 参府旅行中の日記」、思文閣、1983年。
- (3) ハンス・ケルナー(竹内精一訳)『シーボルト父子伝』、創造社、1974年。
- (4) (5) 佐藤 図「シーボルト『日本』解説」(『西洋稀観書展』、紀伊國屋書店、1994年)。
- (6) ヨーゼフ・クライナー「三人のシーボルト」(同氏編『黄昏のトクガワ・ジャパン』、NHKブックス、1998年)。
- (7) 齊藤信「シーボルト『日本』の最終刊行年とその全体構想について」(『シーボルト日本』6巻、雄松堂、1979年)。

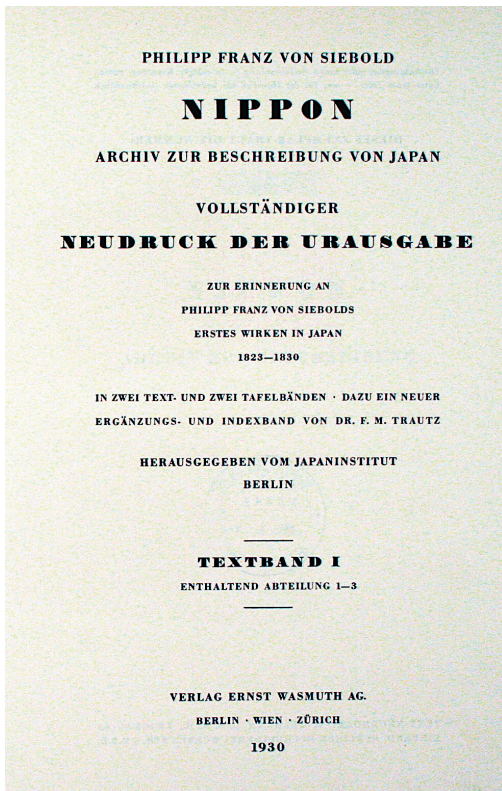
『NIPPON』の内表紙



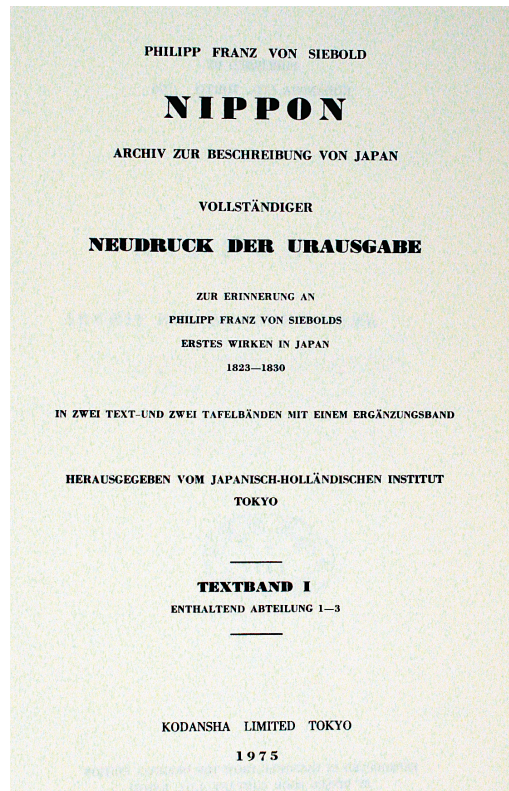
初版 内表紙 1832年 九大本



クオリッチ版 内表紙 1852年 福岡県立図書館本



トラウツ復刻版 内表紙 1930年



講談社復刻版 内表紙 1975年

2.色つき図版の比較

[1]第1回配本(1832年)の色つき図版

九大本に残る配本時の目録「INHALT」によると、第1回配本では、本文として「NIPPON I」と「NIPPON III」の一部が配られた。『NIPPON』はI～VIIの7章構成であり、1章は日本の地理情報やヨーロッパ人による日本発見史、および平戸・出島の商館について記述し、3章は日本の歴史を神話から説き起こしている。図版は本文に対応して、口絵を含めて17枚が添えられ、そのうち考古遺物を描いた2枚に彩色がある。

彩色された図版は〔222〕(以下の通し番号は、雄松堂の日本語訳「シーボルト『日本』図録」1.2.3巻に対応している)「^{まがたま}勾玉・^{きんかん}金環」・〔223〕「^{くだたま}管玉ほか」であり、その解説は、シーボルト門人の伊藤圭介(名古屋の植物学者・医師)が提出したオランダ語論文(「勾玉、即ちまがった宝玉の記述」)をもとに、シーボルトの識見を加えて記述されている(1)。シーボルトは、勾玉の種類・使用・分布或いは系統論を述べており、より高い文化をもつ民族が日本へやってきて中心部に王朝を創建したため、かつての民族はその宝石をもって北・南に逃れた。今日(江戸時代)でも蝦夷・千島では勾玉が「シトギ」という貴重な装飾品として用いられ、琉球では勾玉によく似た石を身につけて宗教行事の装飾品にしている、という(2)。彼の文化人類学的視点からの説は、現代の考古学からみると批判すべき部分はあるものの、忘れることのできない日本考古学史上の業績と評価されている(3)。

彩色のない勾玉・金環・管玉類は、多くが伊藤論文からの転写である。もともと伊藤の図は簡単で彩色もなかった(伊藤は木内石亭『曲玉問答』(4)をネタ本としている)。むしろ『NIPPON』の方が立体感があり、図として洗練された表現となっている。

彩色された勾玉類は、シーボルトが収集したコレクション或いは友人のコレクションの模写であり、シーボルトは本文の注記で、「私は勾玉を手に入れようといろいろ努力してみたが、III第1図(b)の2.5.6.7.11にみられるようなものを得たにすぎなかった」という。したがって、彩色された勾玉類は、実物や実物の模写(彩色あり)がシーボルトの手許にあったことになり、それをもとに色が塗られた。九大本と福

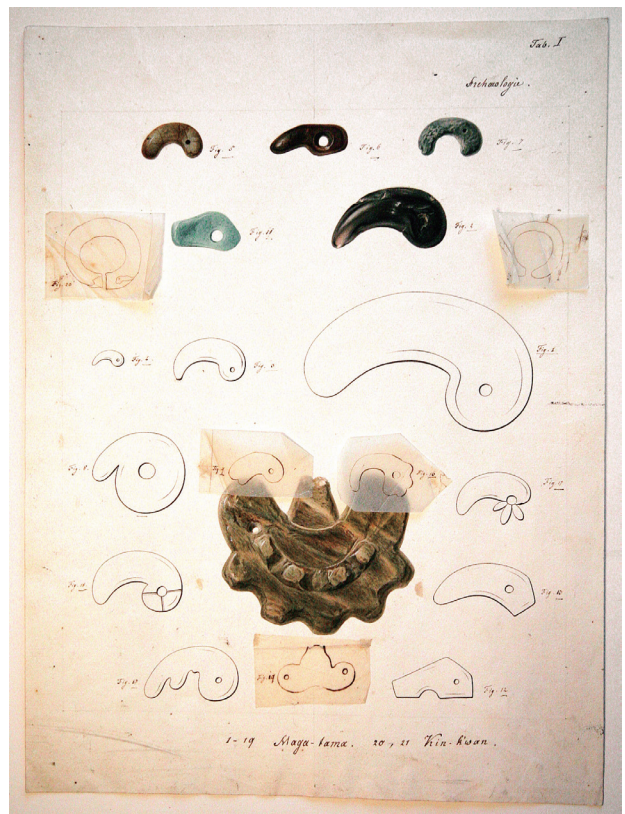
岡県立図書館本とを比べてみても、他所の『NIPPON』と比べてみてもそれほど大きな差異はなく、翡翠の勾玉や金メッキの一部が剥がれ内部の銅が露出した金環の様子がよく描かれている(5)。彩色される以前の石版画は、シーボルト記念館本が示しているように、金環の部分がかなり薄かった。

【注】

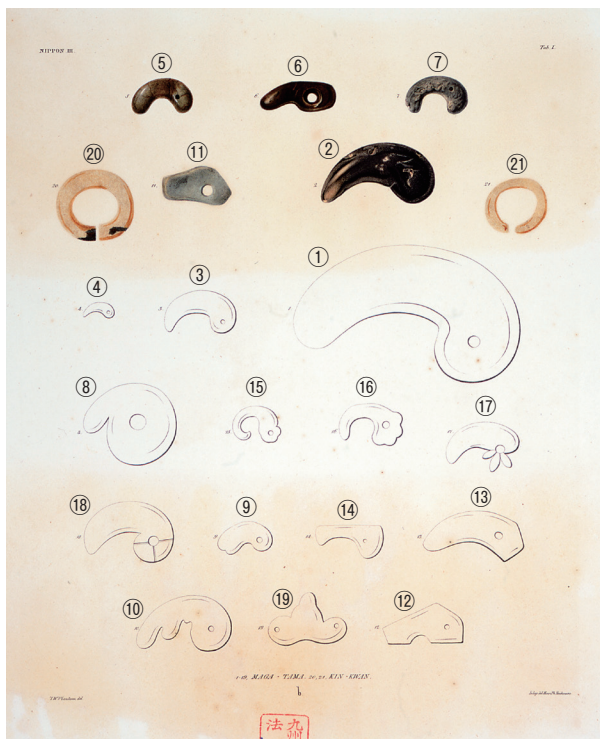
- (1) 緒方富雄 他「門人がシーボルトに提供した蘭語論文の研究」(日独文化協会編『シーボルト研究』、岩波書店、1938年)。伊藤論文の複製・日本語訳はシーボルト文献研究室編『施福多先生文献聚影』(荒井書店、1936年)。原本はポフム大学(ドイツ)図書館にある。
- (2) 『シーボルト『日本』』4巻、10頁(雄松堂、1978年)。
- (3) 齊藤 忠「勾玉に関する記述」(『シーボルト『日本』の研究と解説』、講談社、1977年)。
- (4) 『曲玉問答』(『木内石亭全集』1巻、1926年)。
- (5) 高倉洋彰氏(西南学院大学)のご教示による。

【補注】

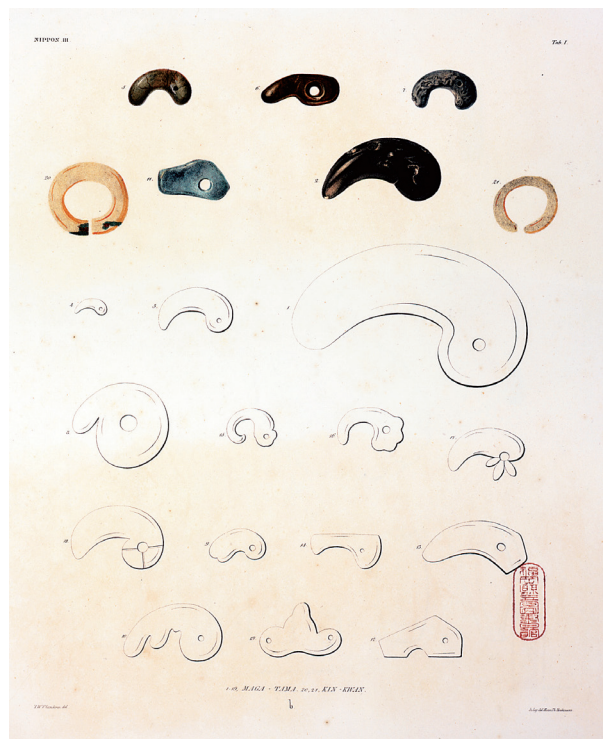
『NIPPON』原稿などのシーボルトの私的な文書を所蔵するブランデンシュタイン城(ドイツ、ヘッセン州、シュルヒテルン市郊外)には、勾玉などの下絵がいくつか残っている。これは印刷過程の校正を示すのではなく、版下であり、シーボルトがどのように図版を作り上げていったかを知ることができる。コンスタンティン・フォン・ブランデンシュタイン=ツェッペリン氏所蔵。



[222] NIPPON III 第1図(b) 勾玉・金環



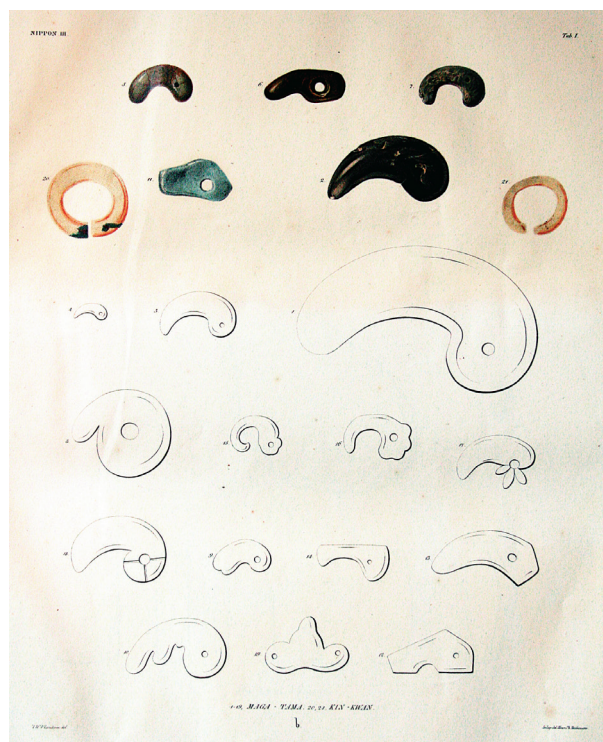
九大本



福岡県立図書館本

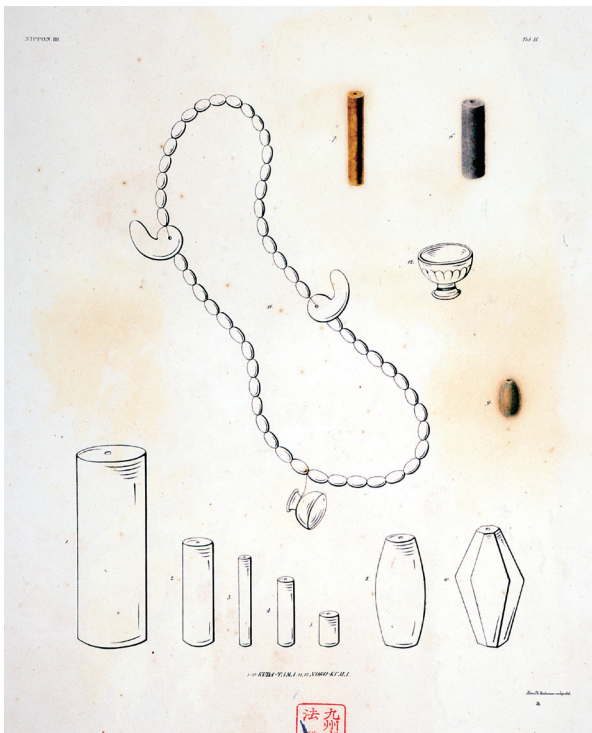


シーボルト記念館本

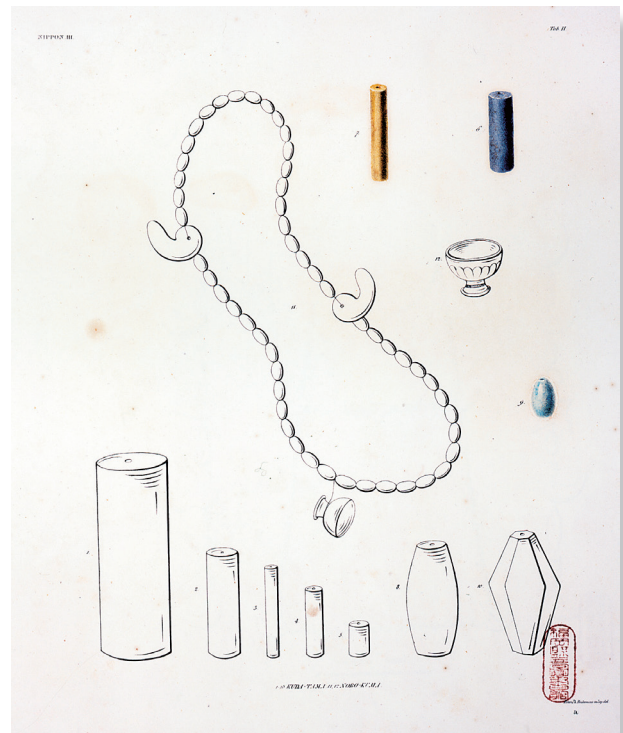


クオリッチ版 永青文庫本

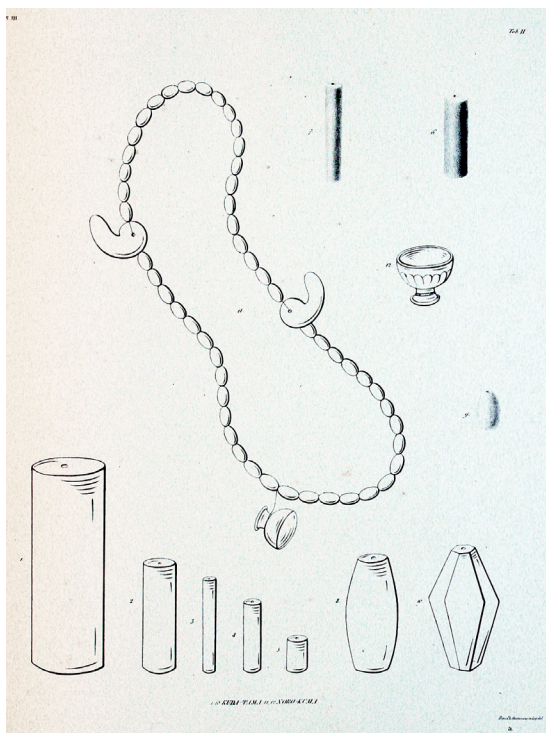
[223] NIPPON III 第2図(a) 管玉ほか



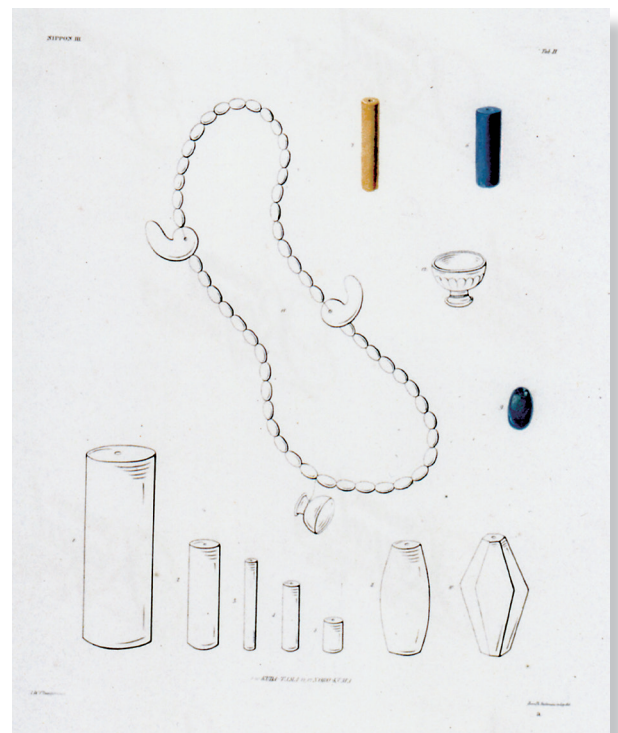
九大本



福岡県立図書館本



シーボルト記念館本



初版 武田科学振興財団本

[付記] [1]「日本の近隣諸国と保護国—日本の原地図による」

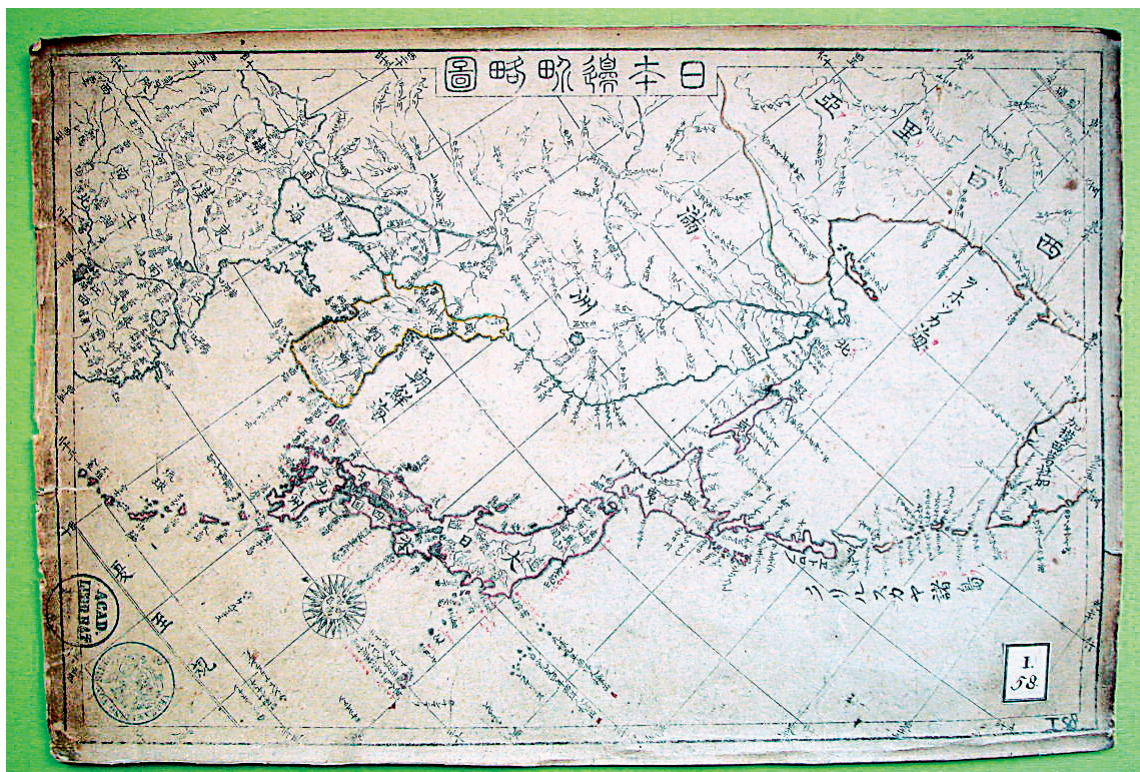
第1回配本におけるメインの図版は、「日本境界略図」であろう。これは日本を含めた東アジア地域を概観できる地図であり、当時のヨーロッパでいまだ不明だった樺太(サハリン)について、これが島であるとして「St. Mamia(Seto)1808」と記し、間宮林蔵の成果であることを強調している。この原図は、幕府天文方の高橋景保が文化6年(1809)に銅版で試作したものであり、シーボルトはこれを高橋から貰っていた。ただし、高橋は「日本境界略図」と世界図の「新鑄総界全図」をセットにし、自ら序文を、跋文を大槻玄沢が添えた卷子仕立てとしていた(1)。シーボルトが入手したのは「日本境界略図」のみであり、今もライデン大学図書館のシーボルト・コレクションに残っている。それには、シーボルトも読むことのできたカタカナが地名の横に朱書きされている。タイトルには朱書きがなく、シーボルトは読み間違った。『NIPPON』のなかの「日本境界略図」は「ニッポン エ シン リョウ ツ (NIP-PON JE SIN RJOO TSU)」と読まれている。原図にある篆刻で書かれたタイトルの読み誤りである。

『NIPPON』図版の「日本境界略図」には、異なる石版の画がある(2)。九大本と福岡県立図書館本を比べると、右下にあるタイトルの文字が異なっており、明らかに版が違う。そして福岡県立図書館本には色も施されている。他所のクオリッチ版がすべて福岡県立図書館本と同じでなく、また他所の初版がすべて九大本と同じ版ではない。しかも彩色の有無が両方の版に入り交じっている。彩色の仕方に多少の違いはあるものの、中国・朝鮮・ロシア・日本の境界を色分けする方法は共通しており、購入者による彩色でなく、当初から色が塗られていたと考えられる。原図である高橋の「日本境界略図」も境界を色分けしている。現段階では結論づけることはできないが、初版・クオリッチ版の約半数に彩色された「日本境界略図」が含まれている。

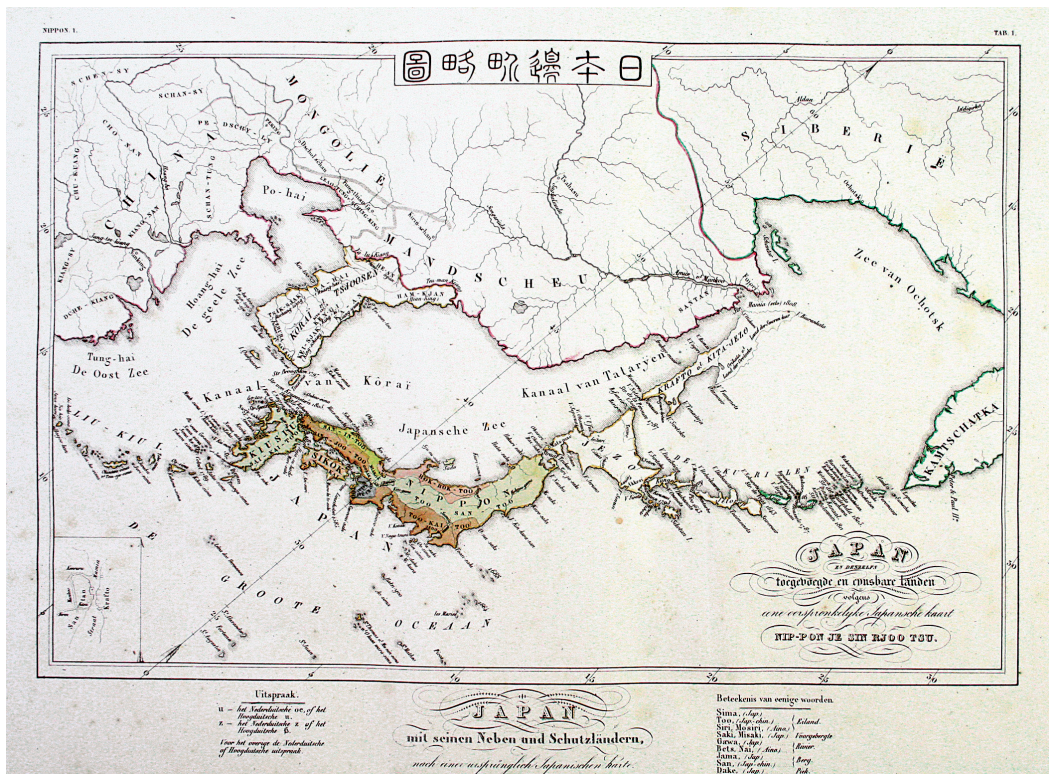
〔注〕

(1) 上原久『高橋景保の研究』(講談社、1977年)。北海道松前町郷土資料館に卷子仕立ての「日本境界略図」「新鑄総界全図」があり、その画像は九州大学デジタル・アーカイブ(<http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/kageyasu/>)で見ることができる。

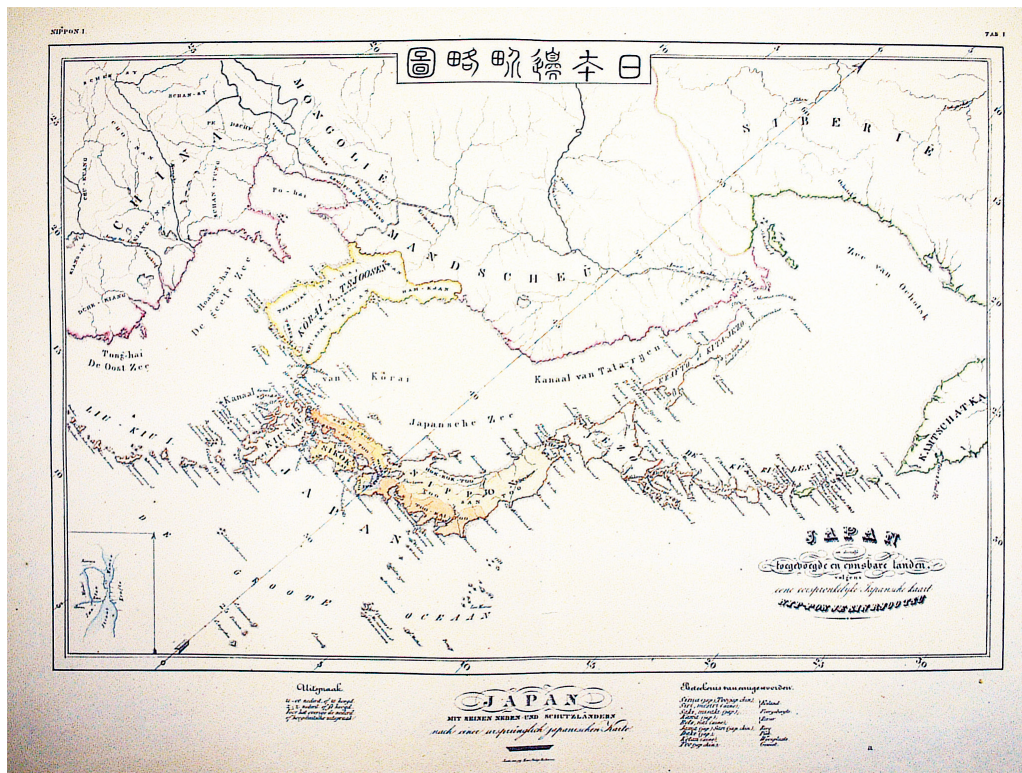
(2) 海野一隆「シーボルトと『日本境界略図』」(『日本洋学史の研究』V、創元社、1979年)。



ライデン大学図書館 蔵



クオリッチ版 神戸市立博物館本



初版 近畿大学本

[2] 第2回配本(1833年)の色つき図版

第2回配本は1833年の秋頃に出たという(1)。本文編は、「NIPPON IV」の産業に関する章で、茶の栽培・製法と茶園の土壌などについての記述。そして「NIPPON VII」の近隣諸国に関する章の朝鮮(「高麗」)についての記述が出た。図版は本文に対応する17枚が配られ、そのうちの[326]「茶の木と実」・[337]「朝鮮 漁夫の一家」の2枚に手彩色がある。

シーボルトは茶を植物学の研究対象として多くの標本を集めており、それらは今もライデンの国立植物標本館に保管されており、そのなかに「茶の木と実」の画に使用された原標本も残っているという(2)。その標本から作ったのか、図版の原画は他の多くの植物画とともに、ロシアのサンクト・ペテルブルグ(旧レニングラード)にあるコマロフ植物研究所にある(3)。作者は不明であり、この原画をもとに一部分だけが彩色されていることがわかる。

茶に関するシーボルトの記述は、自ら体験・観察した成果とともに、1830年に門人の高野長英が提出したオランダ語論文「日本における茶の栽培と茶の製法」(4)をもとにしている。彼の目標は、ケンペルやツンベルグの成果を超えることにあり、『NIPPON』出版以前に個別論文を発表していたし、茶の種や苗木をジャバに送ることに成功して製茶業の基礎も築いていた。

一方、朝鮮に関する記述は漂流民からの聞き取りにもとづく。出島の向かい側に対馬藩の屋敷があり、日本に漂着した朝鮮人は漂着地から長崎へ送られた。彼らは長崎で船の修理などを行い、対馬藩を經由して朝鮮へ送り返された。シーボルトは対馬藩屋敷を訪れ、漂着した朝鮮人に面会して直接に朝鮮語や風俗習慣について聞き出した。囲碁をしながら休息する漂流民たちを描いたのは、川原慶賀であり、画の左下に「Toioske Jap. pinx」とある。「Toioske」は登与助であり、日本人の川原慶賀(登与助)が描いたという意である(ラテン語の「pinx」は、「He painted it」ということ)。現在、オランダにあるライデン国立民族学博物館に慶賀が描いた3枚の朝鮮人物画がある。掲示しているように、3枚のうち2枚に慶賀の^{らっかん}落款がある。シーボルトは慶賀の原画を1枚にまとめることにした。彼の指示にしたがって石版画を描いたのは、ライデンで活動し

ていた石版画家のエルクスレーベンであり、その名は画の右下に「Erxleben in lap. delin」と細かく書き込まれている。シーボルトは画の解説のなかで、直接に朝鮮で収集した情報でないと断りつつ、彼らの服装は朝鮮沿岸住民に見られる民族衣装だといい、その目鼻立ちからモンゴル人種に属する北東アジア人の特徴がよく出ているという。

彩色についてみると、九大本の「茶」に明らかなように、彩色された部分の周囲に「にじみ」が見える。当初、九大本は茶葉の色もやや変色しており、単に絵の具がにじんだのかと思っていたが、他所の『NIPPON』にも同様の「にじみ」が確認される。クオリッチ版の福岡県立図書館本にも薄い「にじみ」が認められる。「にじみ」の正体は不明であるが、絵の具の発色や「にじみ」防止のために何かを塗ったものと考えられる。「茶」ほどに明確でないが、第1回配本の勾玉にも彩色された部分の周囲に同じような「にじみ」を確認することができる。「にじみ」のある彩色図版は第2回の配本までであり、その後の図版にはない。この「にじみ」は、石版で刷った後に手で彩色するときの試行錯誤の結果であると考えられる(「にじみ」がほとんど確認できない初版の武田科学振興財団本、クオリッチ版の神戸市立博物館本もある)。とにかく、「にじみ」が初版にも、クオリッチ版にも存在することから、クオリッチが『NIPPON』在庫を買った時にはすでに彩色されていたことになる。つまり、クオリッチ版『NIPPON』の色つき図版は、後の彩色でなく、初版と同じく彩色され、在庫としてシーボルトの手許に保管されていたのである。

同様の試行錯誤は漂流民の画にも施されている。画のバック全体に原画にない背景色がある。これは手彩色でなく、刷られている。石版画ができあがった後に薄い黄土色の背景が刷られ、その後に手彩色が行われている。これも一つの実験だったのだろうか。この形式の彩色図版はこれ以後になく、1枚のみである。背景色を刷る場合に紙がズレたようで、それぞれに背景の位置が微妙に異なったり、傾いたりしている。ここでは他所の例としていくつかあげている。講談社の復刻版は近畿大学本を底本にした画が多く、これもそうであろう。背景の傾き具合が同じである。

〔注〕

- (1) マテイ・フォーラー他(『シーボルトと日本』、Hotei出版、Leiden、2000年)。
- (2) 石山禎一「日本における茶樹の栽培と茶の製法」(『シーボルト「日本」の研究と解説』、講談社、1977年)。
- (3) 『シーボルト旧蔵 日本植物図譜展』(1995年、展覧会カタログ)。
- (4) 高野長英論文の複製・日本語訳はシーボルト文献研究室編『施福多先生文献聚影』(荒井書店、1936年)。原本はボフム大学図書館蔵。



ロシア、コマロフ植物研究所蔵

高野長英「日本における茶の栽培と茶の製法」



ボフム大学図書館蔵

[326] NIPPON VI 第1図(a) 茶の木と実



九大本



福岡県立図書館本



シーボルト記念館本



クオリッチ版 永青文庫本

[337] NIPPON VII 第1図(a) 朝鮮 漁夫の一家



九大本



福岡県立図書館本



シーボルト記念館本



初版 長崎歴史文化博物館本



講談社 復刻版



初版 近畿大学本

[原画] 朝鮮 漁夫の一家 (ライデン国立民族学博物館 蔵)



川原慶賀 筆



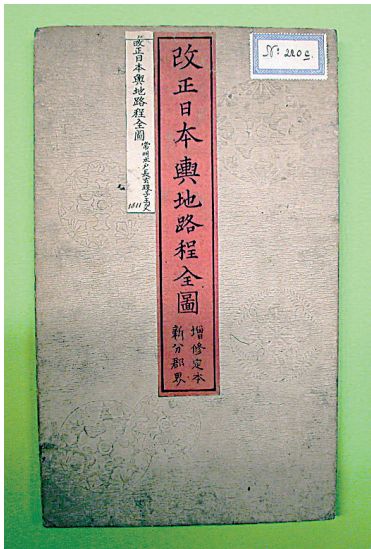
川原慶賀 筆

[3] 第3・4回配本(1835年)の色つき図版

第3・4回配本は1835年の1月と2月にそれぞれ出たという(1)。第3回配本は「NIPPON II」の日本人の人類学的特徴、「NIPPON V」の宗教についての記述。図版は本文に対応して人物像や目の形、仏像を描いた17枚が配られたが、彩色図はなくすべて色なしであった。第4回配本では、本文として「NIPPON I」の日本への旅行記が出され、図版にはシーボルトが測った長崎港の水深図や景観図、長久保赤水の「改正日本輿地路程全図」が出された。図版数は他の配本に比べて少なく、11枚であるが、手彩色による4枚の地図(〔31〕・〔32〕・〔33〕・〔34〕「日本輿地路程全図」)が添えられた。

4枚の地図のタイトルは、漢字で「日本輿地路程全図」と印刷されている。原図のタイトルは、表紙に「改正日本輿地路程全図」(内題「新刻日本輿地路程全図」)とあり、水戸藩の『大日本史』編纂にも関係した儒者、地理学者である長久保赤水の作である。作図は、長久保自身の踏査結果や当時の官撰図類、地理・天文学書の比較考証によるもので、後の伊能図のように実測にもとづいていないが、均整のとれた沿岸線の輪郭など図形の正確において画期的であり、江戸時代後半に何度も版を重ね日本図の主流をなした。シーボルトは『NIPPON』本文のなかで、この図は書店で売っており、教養ある日本人は持っている地図だと述べている(2)。

初版は安永8年(1779)、2版は寛政3年(1791)であり、シーボルトは文化8年(1811)の3版を利用している。ライデン大学図書館には、10点の同系統の「日本図」があり、そのなかにはシーボルト以外の人物による収集も含まれている。そのうちの1点(番号 UB220C)の表紙に「56 改正日本輿地路程全図 常州水戸長玄珠子玉父 1811」



ライデン大学図書館 蔵

という付箋が貼られている。この付箋は、収集した図書類をシーボルトが助手のオフマン・郭成章とともに整理して、1845年に刊行した目録を切り貼りしたものであり、筆跡は完全に一致する。目録は125部発行され、巻頭にはラテン語によるシーボルトの緒言と目次があり、第1部の「百科事典類」から第11部の「木版図」まで内容により詳しく分類され、一連の番号が付されている。ラテン語に翻訳された書名・著者・刊記などはホフマンが担当し、漢字による目録は郭成章が転写して石版に刷った。表紙にある付箋は、郭成章が作成した目録を切り取り、貼り付けている(3)。

文化8年版をもとに、『NIPPON』用の石版画を描いたのは郭成章であり、シーボルトは本文のなかで「中国の書写生の郭成章に忠実な複製の石版を作らせ」という(4)。どれほど「忠実」に写しているかまだ検討していないが、シーボルトは地名を日本語のままに写させた。これは第1回配本の「日本境界略図」の場合と異なり、意図的に行っている。シーボルトは、赤水の地図に緯度・経度はあるが、正確ではないと見抜いており、地名集として刊行したという。彼が意図したところは、「漢字と日本文字で書かれている地名を見つけ出し比較するのに誰にも喜ばれるであろう。このように地図が一般的に役立つことを否定するものではないだろう。現在は漢字と日本文字を読んだり翻訳する機会もあるのだから、地名集としても非常に役立つのは明らかである」と述べる(5)。確かに、現地では翻訳された地図よりもその地の言葉で書かれた地図の方が便利である。シーボルトは、日本の漁民や船乗りは誰でもこの地図を読むことができ、水先案内が可能であるという。

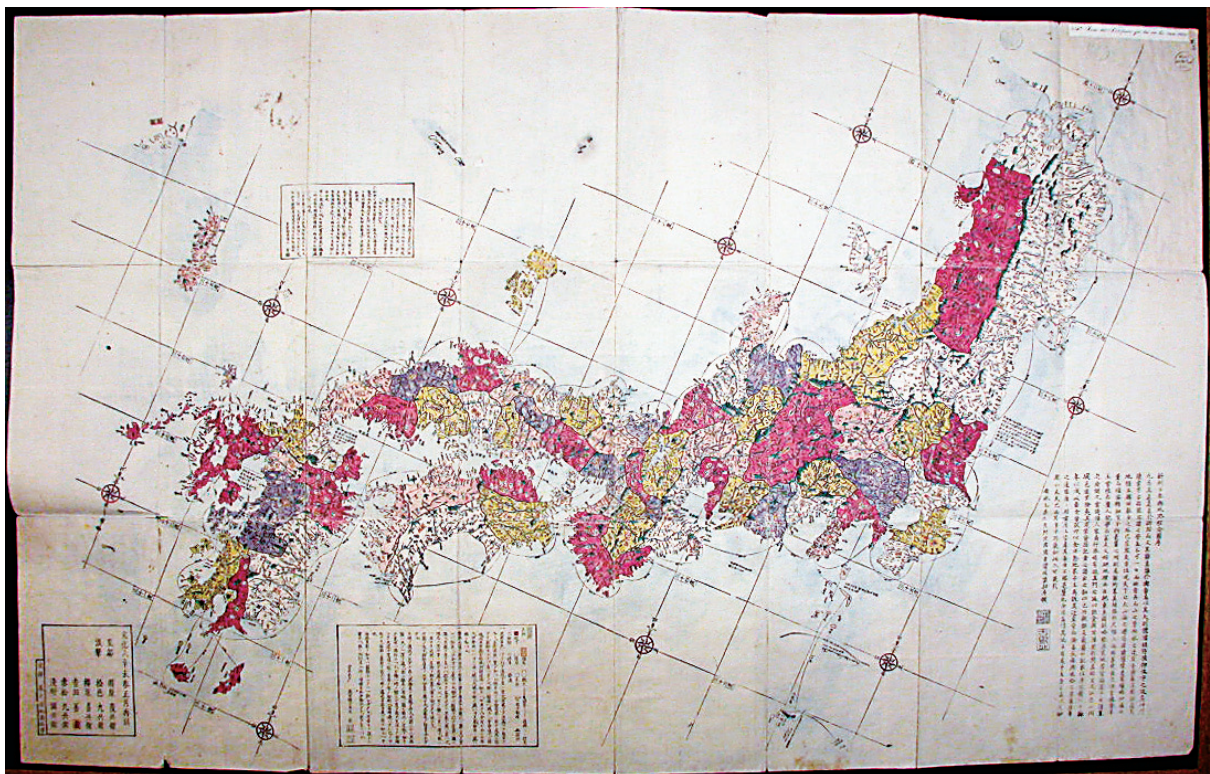
原図の「改正日本輿地路程全図」は縦85cm×横1370cmの大きさであり、シーボルトがこれを4分割して描かせたのも地名を読むことができるようにするためであろう。『NIPPON』のなかの「日本輿地路程全図」は、ファン・ヘルダー社から購入された紙(縦59.5cm×横79.0cm)を切断せずに印刷されている。通常の豪華版図版に比べると、倍の大きさになるので、見開き図または折り込み図として製本されている。

彩色についてみると、原図は国ごとに色分けされてい

る。『NIPPON』でも国ごとに色分けしており、多少の違いはあるが、原図に沿っている。九州・山口を比べると、原図に赤色でしめされた肥前・豊後・大隅・周防の国は、それほど濃くない赤色系統、ピンク色が塗られている。地名が読めなくなるのを避けるため、薄い色合いが採用されたと思われる(九大本と福岡県立図書館本を比べると、九大本が全体的に薄い、彩色の仕方にそれほど大きな差はない)。

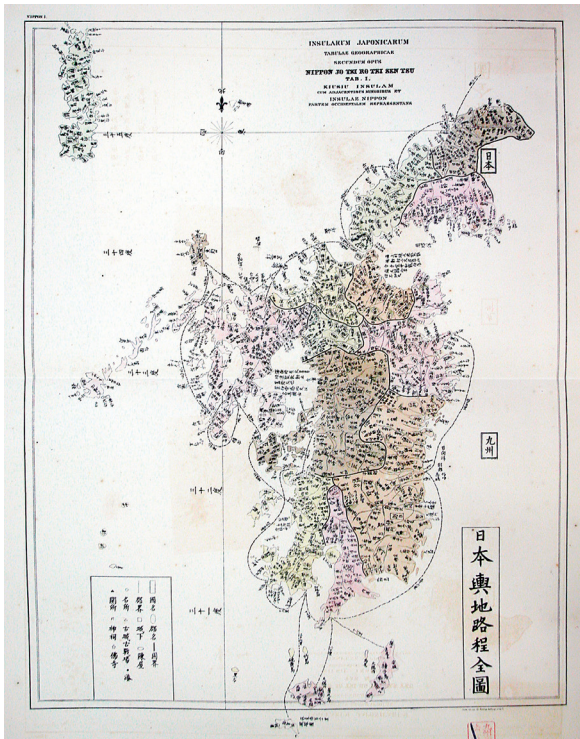
【注】

- (1) マティ・フォーラー他(『シーボルトと日本』、Hotei出版、Leiden、2000年)。
- (2) (4) 『シーボルト「日本」』第1巻、277頁(雄山閣、1977年)。
- (3) 『シーボルト蒐集日本図書目録』(『シーボルトの「日本」の研究と解説』、講談社、1977年)が目録を覆刻している。
- (5) 『シーボルト「日本」』図録第1巻、687頁、「日本輿地路程全図」のシーボルトによる解説(雄山閣、1978年)。

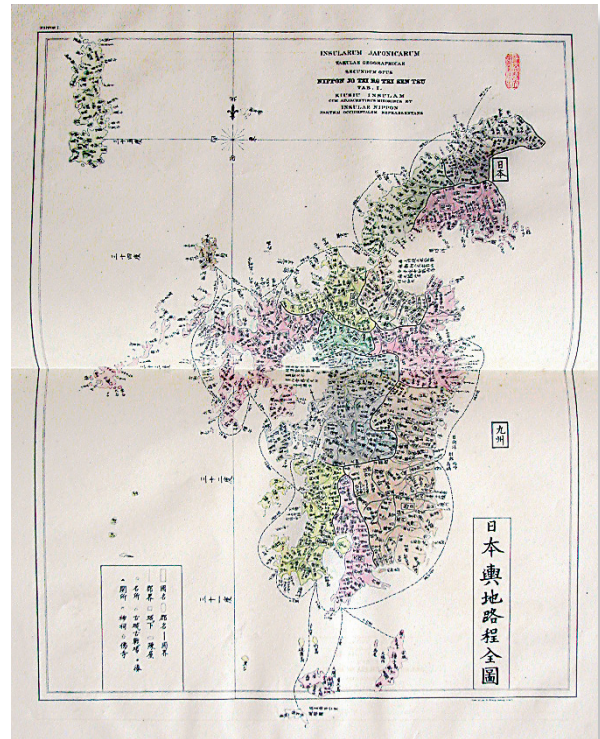


ライデン大学図書館 蔵 文化8年「改正 日本輿地路程全図」

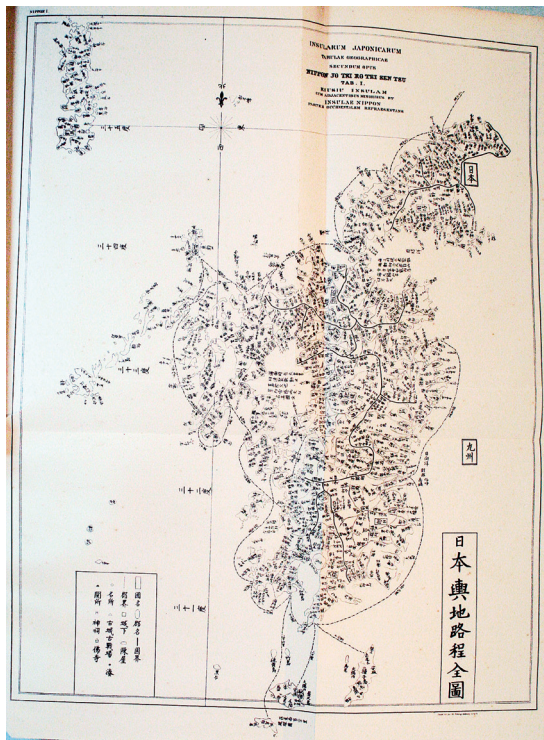
[31~34] NIPPON I 第1図(c) 日本輿地路程全図 一九州、四国、関東、中部地方、奥羽地方一



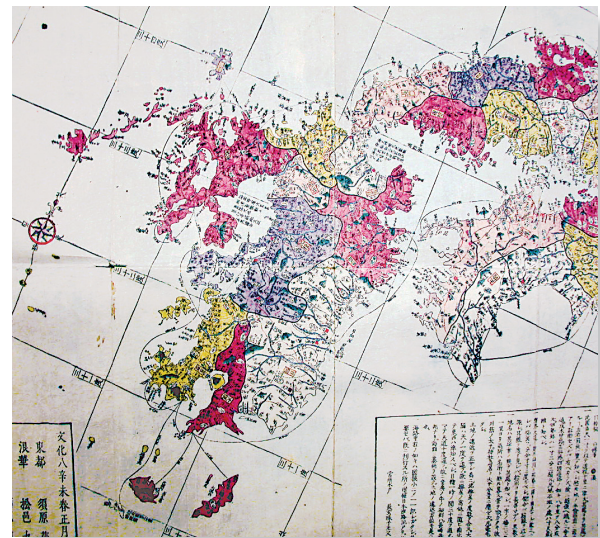
九大本



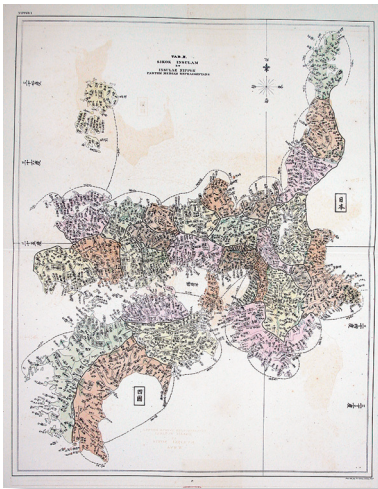
福岡県立図書館本



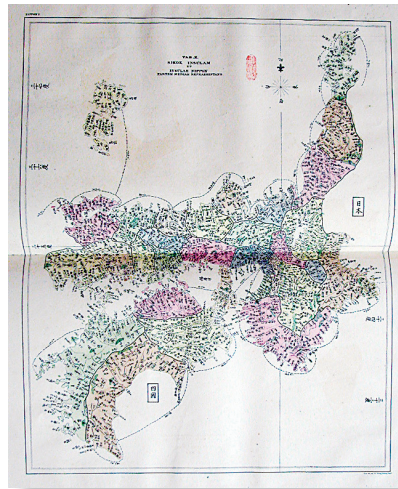
シーボルト記念館本



ライデン大学図書館蔵 拡大図



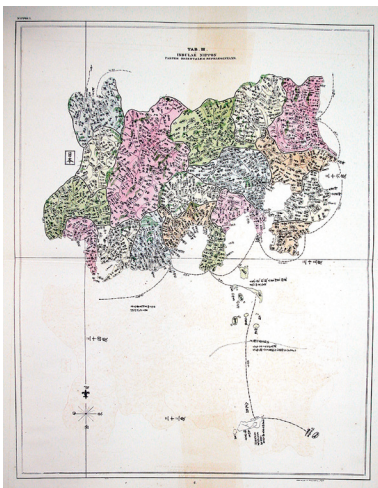
九大本



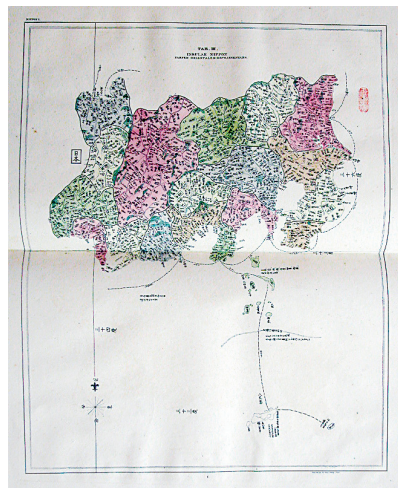
福岡県立図書館本



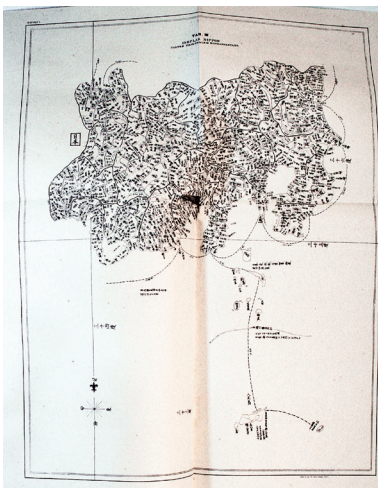
シーボルト記念館本



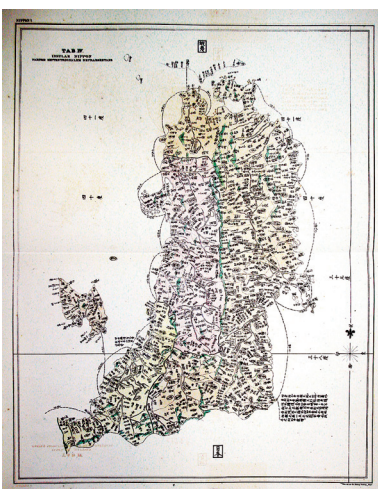
九大本



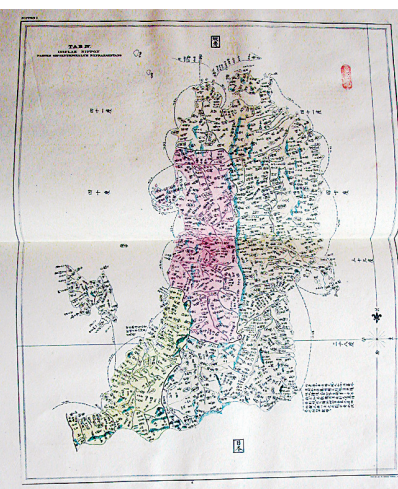
福岡県立図書館本



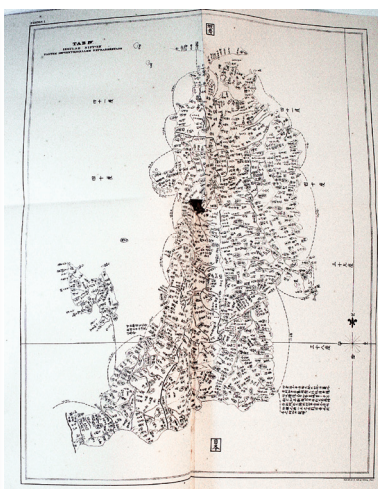
シーボルト記念館本



九大本



福岡県立図書館本



シーボルト記念館本

[4] 第5・6・7回配本(1839年)の色つき図版

第5・6回の配本年代は不明であるが、第7回配本は配本目録の「INHALT」にあるシーボルトの報告から1839年であることがわかっている。これまで、ほぼ1年に1回のペースで配本されてきたことになる。

第5回配本の内容は、本文が「NIPPON II」の江戸参府旅行記であり、図版は長崎から小倉・下関までの風景画17枚が配られた。原画は川原慶賀のスケッチであり、彩色されていたが、『NIPPON』のなかでは色なしで出された。第6回配本も本文は江戸への旅行記となっているが、図版21枚は陸奥の安達太良山(吾田多良山)から薩摩の桜島まで20か所の山々と、シーボルトの日本妻「おたくさ」らの肖像画であった。この辺りから本文と図版の対応は崩れだしてくる。

第7回配本は合併号であった。それまで1分冊ごとに配本されていたが、7回配本は7・8分冊の合併号であり、図版の枚数は倍増した。41枚のうち6枚に彩色がある。本文と図版はまったく対応しておらず、本文は「NIPPON VII」の朝鮮に関する記述。図版は日本の軍事情報と花瓶・香炉などの画であった。戦争用具や歩兵・騎馬武者の画に彩色があり、一部は葛飾北斎が描いたものを原画としている。北斎の原画はライデン国立民族学博物館にシーボルト・コレクションとして保存されている(1)。

〔66〕「戦争用具」の采配や軍配・陣幕を描いた画をみると、九大本は彩色されているが、福岡県立図書館本は色なしである。福岡県立図書館本はクオリッチ版、2折判(大判)の豪華版であり、本来ならば彩色されているはずである。決して色なしの4折判(小判)が挿入されているわけではない。この他にも福岡県立図書館本は無彩色の図版をいくつか含んでいる。その理由として考えられるのは、シーボルトが彩色予定の図版のいくつかを色なしのまま保管していたことによると思われる。クオリッチも彩色せずにそのまま販売した結果、あるものには福岡県立図書館本のように無彩色の図版が含まれ、あるものには彩色図版が揃うこととなった。

クオリッチ版のOAG(ドイツ東洋文化研究協会)本と九大本を比べると、ほとんど同じといえるが、扇の日の丸が大きく違う。OAG本が北斎の原画に沿っているのだが、同様の彩

色を他の『NIPPON』で未だ見たことはない。また、同じくクオリッチ版の神戸市立博物館本では薄い黄色となっている。こうした細かい部分における彩色の違いは、一人ではなく、数人の人々によって彩色されていたことを示している。このことは以後の図版でさらに明らかになる。

〔67〕「戦争用具」も北斎を原画としており、福岡県立図書館本は色なし、神戸市立博物館本は点線の部分を黄色で統一している。現在のところ、この色づかいは1例のみで、他は九大本と同じく原画に沿って赤色で塗られている。

〔73〕「歩兵」は、福岡県立図書館本は色なし、初版の長崎歴史文化博物館本と九大本を比べると、左下にいる歩兵の服装の彩色が異なる。歩兵の服装は青・紫・緑色で塗られており、それぞれの『NIPPON』で微妙に彩色が異なっている。

〔74〕「歩兵」も福岡県立図書館本は色なし、OAG本をみると、歩兵の足下に緑色を塗り、服装にも緑色を多用している。

〔75〕「騎馬武者」も福岡県立図書館本は色なし、神戸市立博物館本では点線の箇所が異なる。

〔76〕「最高指揮官」も福岡県立図書館本は色なし、OAG本と九大本を比べると、服に赤色を塗るやり方がまったく違い、しかもOAG本の背景には水色の空がある。九大本もよく見ると背景に水色が薄く塗られているが、その方法は違っている。

以上、第7回配本は「INHALT」にあるシーボルトの報告によると、前回の配本から少し時間が経っているようであり、彼は配本が遅れたことを詫言っている。7・8分冊の合併号として出すために、それまでの倍の図版を用意せねばならず、より多くの図版に色を塗らねばならなかった。その結果、これまでには見られなかったほどに色合いの違いが目立ってきている。

〔注〕

- (1)「武器・武具図帖」に葛飾北斎の署名はないが、オランダ紙に書かれた北斎の筆とされている(シーボルト・カウンスル編『ヨーロッパに眠る日本の宝—シーボルト・コレクション—』、長崎県立美術館展示会図録、1990年)。

[66] NIPPON II 第8図(c) 戦争用具



九大本



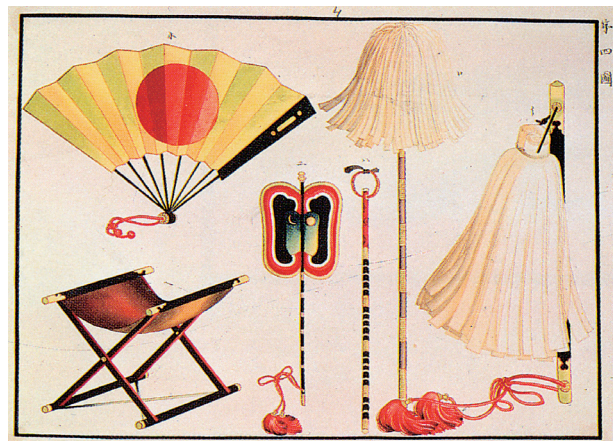
クオリッチ版 OAG本



福岡県立図書館本



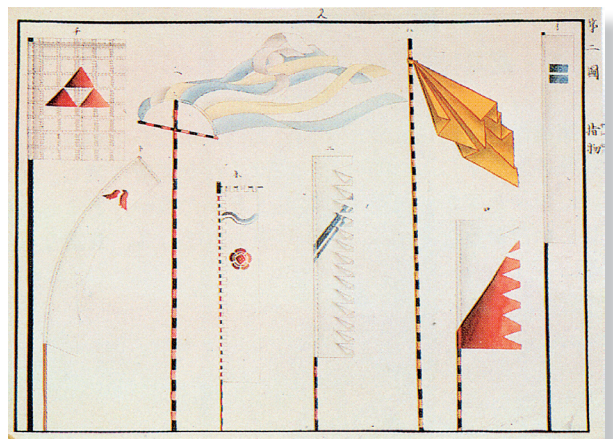
クオリッチ版 神戸市立博物館本



葛飾北斎 『武器・武具図帖』

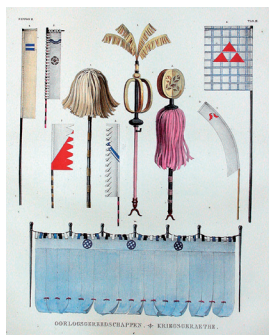


葛飾北斎 『武器・武具図帖』

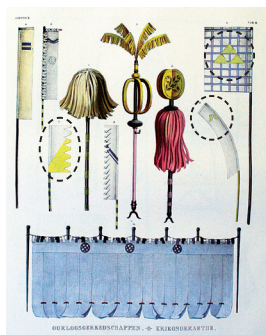


葛飾北斎 『武器・武具図帖』

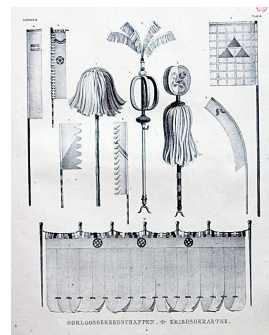
[67] NIPPON II 第9図(c) 戦争用具



九大本



クオリッチ版 神戸市立博物館本

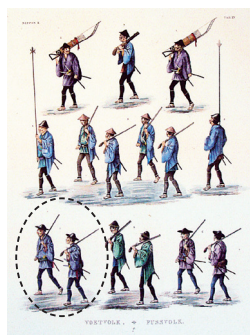


福岡県立図書館本

[73] NIPPON II 第15図(c) 歩兵



九大本



初版 長崎歴史文化博物館本



福岡県立図書館本

[74] NIPPON II 第16図(c) 歩兵



九大本



クオリッチ版 OAG本

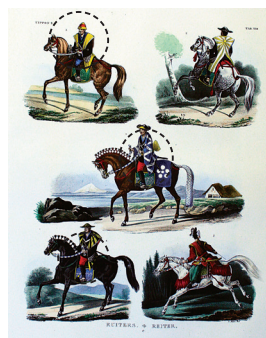


福岡県立図書館本

[75] NIPPON II 第17図(c) 騎馬武者



九大本



クオリッチ版 神戸市立博物館本



福岡県立図書館本

[76] NIPPON II 第18図(c) 最高指揮官



九大本



クオリッチ版 OAG本



福岡県立図書館本

[5] 第8・9回配本の色つき図版

第8・9回の配本年代は不明である。8回配本は9・10分冊の合併号。9回配本も11・12分冊の合併号だった。そして同時配本だった。そのことは「INHALT」から判明する。第8回配本の「INHALT」と第9回配本の「INHALT」は同じ紙に印刷されており、合併配本となっている(1)。分冊で配本された『NIPPON』を製本するとわからなくなるが、九大本は未製本であるので明らかにできた。

第8回配本の本文は、前回配った軍事に関する図版の解説と、他に江戸参府の追加記事、朝鮮の「千字文」に関する報告であった。図版数は合併号だから41枚。そのうち色つきは最大の15枚。内容は身分ごとの日本人の姿や川原慶賀を原画とする結婚式・葬式などの風習に関するものだった。前回配本の「INHALT」において、シーボルトは300枚以上の図版が完成しており、遅れることなく刊行すると記しているが、本文と図版の乖離はますます激しくなっている。

[124]・[125]「町人の服装」は、黒縮緬の紋付を着た裕福そうな町人、裾の長い着物を着た婦人を描く。ともに福岡県立図書館本は色なしであり、長崎歴史文化博物館本と比べると、九大本は少し色合いが違うが、それほど大きな差はない。

[126]・[127]「礼装」は、鮫小紋風の麻上下かみしもを着けた大小姿の武士と、禿かむろを連れ独特の高木履おいらんをはいた花魁を描く。ともに福岡県立図書館本は色なし、1930-31年のトラウツ復刻版と九大本を比べると、武士の着物や上下の色合いが少し異なり、花魁や禿の襟の色が少し異なっている。

[128]「従者を連れた身分の高い日本人」にはいくつかのパターンがある。中間か小者こものを連れた身分ある武士は、羽織・袴に鮫鞆の大小を差し、手袋をはめている。従者は後ろに木刀を差していかにも控えた姿である。原画と思われる葛飾北斎筆の水彩画がライデン国立民族学博物館にあり、手足の男性的な肉づきを描く線などに北斎の特徴ある筆づかいが認められるという(2)。これを石版画に描いたエルクスレーベンは、従者がもつ風呂敷の用途・実体がかめなかったのか、すっかり省いている。石版画を彩色していく時にいろいろのパターンが生じ

た。まず、福岡県立図書館本では他にない雲が加えられており、従者の片足を塗り忘れていた。九大本では武士の帯・刀つばの鐔つばに色はないが、初版の大英図書館本・長崎歴史文化博物館本・慶応大学本、およびクオリッチ版の永青文庫では赤く塗られている。これに対し、クオリッチ版の神戸市立博物館本・天理大学本や1930-31年のトラウツ復刻版では帯が緑に塗られている。これは明らかに何人もの手によって別々に彩色された結果である。

[129]「上流の婦人」は、振袖を着て髪にはまだ娘らしい飾りもついている。上の画に比べると、あまり差は見られない。

[132]「農民」は、薪を頭上に乗せている京都の大原女、担い棒の前後に反物やゴザなどを入れた半農半商の男、鋤・鋤をもつ老人を描く。原画はミュンヘン国立民族学博物館のシーボルト・コレクションに残る。作者は川原慶賀であり、109態にのぼる人物画が1冊の画帳(『人物画帳』)(3)に仕立てられている。川原慶賀はこの3人を一緒に描いていないが、シーボルトは3人をまとめて「農民」として『NIPPON』に載せ、原画にない背景も追加している。服の色を変えているが、3人の姿はかなり忠実に写している。『NIPPON』の彩色に多少の違いはあるが、それほど大きく違っていない。

[134][135]「帝(天皇)」・「后(皇后)」について、シーボルトは江戸参府の自筆『日記』(2)のなかに書いている。もちろん天皇に会ったわけでないが、江戸参府の帰路、京都の宿に友人の「肥後介」がやってきて、「彼は家から宮廷で着る衣装をもってこさせ、天皇や宮中のその他の公家の服装を教えてください」(6月4日)とある。この後、指貫さしぬき・狩衣かりぎぬ・烏帽子えぼしなどの衣装について細かく書いている。天皇・皇后を描いた画の主題は衣装にあったと思われるが、彩色にはかなりムラがある。例示しているように、天皇も皇后も彩色の仕方はバラバラであり、この他の『NIPPON』と比べてみても、いくつかのパターンに分類できないほどに違っている。何人もの手によって塗られた結果であり、かなり「雑」である。

[137]「公家の宮廷服」・[141]「帝の側室(宮中の女官)」も服装について描く。烏帽子のうしに直衣を着した天皇・公家の平常服(右側)、左側は衣冠姿の略式礼装を描

いている。女官についても右が平常服、左が略式礼装なのだろうか。シーボルト『日記』に「お局はズボンに似た独特の長衣を着ている。赤い色をしている」とあり、京都で衣装を見せてもらっている。彩色の相違は天皇・皇后ほどに激しくないが、犬の首輪を塗り忘れたり、赤の色合いが大きく違っている。

〔142〕「将軍」は、烏帽子に狩衣・指貫の袴を着した立ち姿、シーボルト参府時の将軍は徳川家斉であった。〔143〕「将軍の御台所」は內衣に単・相・表着を重ね、その上に唐衣を着て、腰には晴れやかな裳をつけている。将軍の彩色では、狩衣の模様の色に違いがある。これに比べて、御台所はどの『NIPPON』もより丁寧に塗られているが、例示しているように、九大本の裳と扇子は黄色が薄い。永青文庫本のような色合いが多いようである。

〔144〕「武家の礼装」は、左が五位以上の武家の式服、右が長上下の盛装・礼服であり、大名や上級旗本の服装を描いている。彩色の相違は、九大本系統と長崎歴史文化博物館本系統に大きく分かれる。〔145〕「大名の妃」は友禅の小袖を着て、髪を後ろに長く垂らし、手には虫などを追い払う払子をもっている。小袖の彩色は丁寧に塗られており、違いはないが、払子の彩色は細かい点が微妙に異なっており、何人かの手によって塗られたことがわかる。

第9回配本は8回配本と同時であり、図版35枚に付図「原図と日本人作成による天体観測に基づく日本国地図」が配られた。ここでも本文と図版はばらばらに近く、本文は「NIPPON Ⅲ」神話・歴史であるが、図版は楽器・風習・肖像画となっている。彩色された図版は琵琶・琴・三味線などを奏する4枚の画であった。

〔248〕「楽器 倭琴・琴」は、下を倭琴としているが、現在見られる典型的なものとは幾分違っている。上は中国の琴を弾ずる画であろうが、両手に爪を着けるなどの不正確な部分もある。〔249〕「楽器 琵琶・箏」は、盲僧が演奏する琵琶と、婦人が弾ずる箏を描く。〔250〕「楽器 三味線・鼓弓」は、盲僧の弾く4絃の鼓弓と三味線をひく女性を描く。女性は重ね着をした下着の襟・裾と共に、女郎ではないかと思われる。よく見ると、彼女の唇には青色が塗られている。この化粧について、喜田川守貞『近世風俗志』(5)に「近來は紅を濃くして唇を青く光ら

するは何事ぞ」とある。三味線をひく女性は文化・文政期(1820年頃)に流行した「笹色紅」をしているのである。やはり青い唇の流行は長続きせず、天保頃には淡い紅に戻ったという。3点の



九大本

図版の彩色は、8回配本の彩色図版と比べるとかなり丁寧であり、あまり相違は見られない。

〔254〕「面をかぶった踊り手 鬼・狐・獅子」は、各地に伝わる民俗芸能を描いたものであり、原画は川原慶賀『人物画帳』のなかにある。シーボルトは、それぞれ別々に描かれた踊り手を一枚にまとめさせ、背景も追加させている。石版画家の名前は左下に「van straaen」(ファン・ストラテン)とあるが、彼の詳細は不明である。左の鬼面をつけた踊り手の原画には、「越後獅子・角兵衛獅子」というメモ書きがある。しかし、かなり印象が違う。川原慶賀は現在の佐賀県から長崎県一帯に分布する「面浮流」をモデルにしたと思われ、今も鉦・太鼓・笛にあわせて鬼面をつけた「かけうち」という役が太鼓を叩きながら踊る。中央の狐面について、原画に「冬期、狐の社に参詣する信者」とメモがあり、稲荷神社へ参詣する人物という。右手に鈴をもっており、異様な姿である。左の獅子面は、額に「王」の文字があり、現在も長崎地方では「王」の字を記した緑色の獅子頭が使われている。彩色については、原画と比べてみても、それほど大きな違いはなく、かなり忠実に彩色されている。ただし狐面はアレンジされている。

以上、第8・9回配本は合併号・合併配本だったので、配られた彩色図版は多く、19枚に及んだ。シーボルトは、多量の図版に色を塗らねばならず、これまで以上に多くの人々に依頼して色を塗らせた結果、天皇・皇后の図版に見られるように、かなり「雑」な彩色が多くなっている。

〔注〕

- (1) 宮崎克則「復元:シーボルト『NIPPON』の配本」(『九州大学総合研究博物館研究報告』3号、2005年)。
- (2) オランダ国立ライデン民族学博物館 シーボルト・コレクション 秘蔵浮世絵解説書、講談社、1978年。
- (3) 『人物画帳』は、『週間朝日百科 新訂増補 日本の歴史』(2002~2004年)121冊に「江戸時代人物画帳」と題して紹介されている。
- (4) 齊藤 信「シーボルト 参府旅行中の日記」134頁、思文閣、1983年。
- (5) 喜田川守貞『近世風俗志』2巻 91頁、岩波書店、1997年。

[124] NIPPON II 第1図(e) 町人の服装



九大本



初版 長崎歴史文化博物館本



福岡県立図書館本

[125] NIPPON II 第2図(e) 町人の服装



九大本



初版 長崎歴史文化博物館本



福岡県立図書館本

[126] NIPPON II 第3図(e) 礼装



九大本



トラウツ復刻版



福岡県立図書館本

[127] NIPPON II 第4図(e) 礼装



九大本



トラウツ復刻版



福岡県立図書館本

[128] NIPPON II 第5図(e) 従者を連れた身分の高い日本人

武士と従者 葛飾北斎



九大本



国立ライデン民族学博物館 蔵



福岡県立図書館本



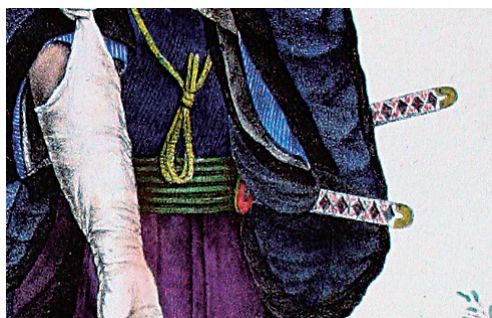
初版 大英図書館本



初版 慶応大学本



クオリッチ版 天理大学本(a)



拡大 クオリッチ版 神戸市立博物館本

[129] NIPPON II 第6図(e) 上流の婦人



九大本



クオリッチ版 天理大学本 [c]

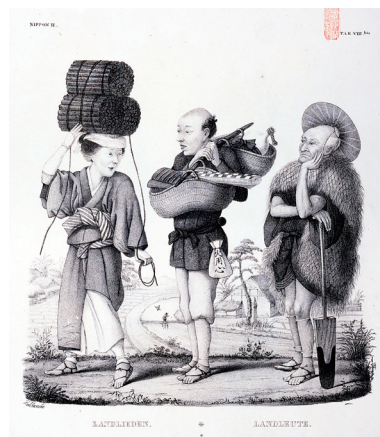


福岡県立図書館本

[132] NIPPON II 第8の2図(e) 農民



九大本



福岡県立図書館本



『人物画帳』



『人物画帳』



『人物画帳』

[134] NIPPON II 第10図(e) 帝(天皇)



九大本



福岡県立図書館本



初版 長崎歴史文化博物館本



トラウツ復刻版

[135] NIPPON II 第11図(e) 后(皇后)



九大本



福岡県立図書館本



初版 大英図書館本



クオリッチ版 神戸市立博物館本

[137] NIPPON II 第13図(e) 公家の宮廷服



九大本



クオリッチ版 永青文庫本



福岡県立図書館本

[141] NIPPON II 第17図(e) 帝の側室(宮中の女官)



九大本



クオリッチ版 永青文庫本



福岡県立図書館本

[142] NIPPON II 第18図(e) 將軍



九大本



初版 長崎歴史文化博物館本



福岡県立図書館本

[143] NIPPON II 第19図(e) 将軍の御台所



九大本



クオリッチ版 永青文庫本



福岡県立図書館本

[144] NIPPON II 第20図(e) 武家の礼装



九大本



初版 長崎歴史文化博物館本



福岡県立図書館本

[145] NIPPON II 第21図(e) 大名の妃



九大本



クオリッチ版 神戸市立博物館本



福岡県立図書館本

[248] NIPPON IV 第7図(c) 楽器(倭琴・琴)



九大本



福岡県立図書館本



シーボルト記念館本

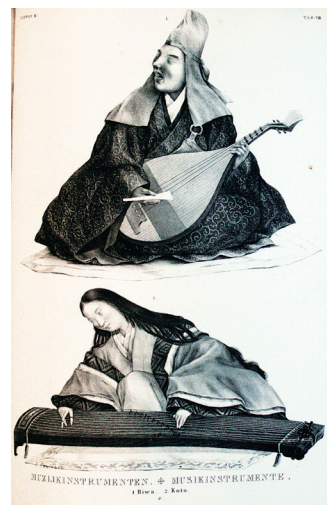
[249] NIPPON IV 第8図(c) 楽器(琵琶・箏)



九大本



福岡県立図書館本



シーボルト記念館本

[250] NIPPON IV 第9図(c) 楽器(三味線・胡弓)



九大本



福岡県立図書館本



シーボルト記念館本

[254] NIPPON IV 第13図(c) 面をかぶった踊り手



九大本



福岡県立図書館本



『人物画帳』



『人物画帳』



『人物画帳』

[6] 第10回配本の色つき図版

第10回の配本年代は不明。これは13・14分冊の合併号であり、本文は「NIPPON Ⅲ」の神話・歴史についての補足文と暦に関する記述。図版数は40枚、本文と関係するのは暦・時計を描いた5枚だけで、その他は本文と関係のない寺社の全景図や僧侶・神主などの人物画である。彩色図版は8枚にのぼる。

〔301〕「**仏教** ^{こうたい} 皓台寺本堂の内部」は、慶長期、長崎に建立された曹洞宗の禅寺。〔300〕の図版で全体の伽藍配置を描き、次に本堂の内部を彩色で紹介している。福岡県立図書館本も彩色されており、九大本と比べると、釈迦・文殊・普賢を安置した檀の両側にある灯籠などの色合いが違うが、他所は似ている。

〔306〕「**仏教** 浄土宗 大音寺釈迦堂内部」も江戸初期に建立された長崎の浄土宗寺院。前の図版で伽藍配置を、この画で本堂の内部を色つきで紹介する。天井に天蓋のある本堂の彩色は、九大本・福岡県立図書館本ともに畳や天井の色合いが違っているが、それよりも色の塗りムラが目立つ。永青文庫本・OAG本・長崎歴史文化博物館本などでも同様であり、上手い彩色とはいえない。

〔310〕「**仏教** 法華宗 本蓮寺の堂内」は、長崎最初の日蓮宗寺院。ここでも本蓮寺の全景を描いた後に本堂内部を紹介している。須弥壇の中央に本尊南無妙法蓮華経題目の宝塔、左右に釈迦如来・多宝如来の宝塔がある。九大本・福岡県立図書館本ともに彩色は似ており、色ムラもある。そして〔301〕と同じように灯籠の色合いが違う。他所の『NIPPON』をみると、九大本のような色合いが多いようである。

〔311〕「**仏教** 真言宗 大徳寺観音堂内部」は、真言宗の大きな寺院であったが、明治以降に廃寺となり、観音堂も現在は失われている。この画が往時の面影を伝えるのみである。九大本・福岡県立図書館本の他に、1930-31年のトラウツ復刻版も例示した。彩色の色ムラは九大本・福岡県立図書館本および他所の『NIPPON』にもあるが、トラウツ復刻版ではほとんどない。ライデン国立民族学博物館のシーボルト・コレクションに残る原画（作者不明）と比べると、トラウツ復刻版がもっとも丁寧な彩色で

あることがわかる。

トラウツは復刻版の作成において、完全本に近いものだけでも37～38部の『NIPPON』を対校したといわれており、そのなかの優れたものを底本にした。復刻版を印刷する際、色つき図版は色刷されただけでなく、手彩色が施されている。肉眼で見ると、濃い色の部分に手筆で塗った跡を確認できるし、時には絵の具がはみ出していることもある。1975年に講談社が出した復刻版は完全な印刷であったが、200部限定(1)のトラウツ復刻版は、初版『NIPPON』に近い彩色となっており、講談社のものとはまるで違う。

〔313〕「**神道と仏教** ^{かんぬし やまぶし} 神主・山伏」は、上の2人が神主、下が山伏とある。右側の神主は、^{い かんそくたい しやく}衣冠束帯に笏をもつ姿から宮中の文官が正装した姿と考えられ、彼らが勅使として神社を訪れたときの姿を描いたのではないかと いわれる(2)。神主の原画はライデン国立民族学博物館にあり、作者は川原慶賀ではないかというが、落款もなく、慶賀作品としては顔の表情が非常に乏しいという。彩色は福岡県立図書館本にもあり、寺院のような色ムラもなく、少し色合いは異なるが、原画に沿った彩色が施されている。

〔315〕「**仏教** 禅宗・浄土宗・一向宗の僧」は、上の2人が禅僧、下部の左が浄土宗の僧、右が一向宗の僧とある。いずれも墨染めの衣を着て袈裟をつけている。禅僧の1人・浄土宗の僧については、原画がライデン国立民族学博物館にある。原画に沿って彩色されており、どの『NIPPON』もほぼ同じである。

〔316〕「**仏教** 法華宗・真言宗の僧 ^{かんじん もう} 勧進僧 盲僧」。上の右側が法華宗の僧侶。通常は鼓を打つが、ここでは「バチ」で「カネ」をならしている。下の右側が真言宗の僧で、^{じやくじょう じゅうず}五条袈裟をつけ錫杖と数珠をもつ。原画はライデン国立民族学博物館にある。下の左側は勧進僧であり、寺の「建立」を訴えながら各地を巡り資金を集める。この原画はミュンヘン国立民族学博物館の『人物画帳』のなかにある。原画の小旗は青色で「本堂建立」とあるが、『NIPPON』では白地に「建立」とだけ記され、肩の布袋

や服の色も変えられている。上部の左が盲僧の琵琶法師である。原画はライデン国立民族学博物館にあり、それに沿った彩色となっている。もともと、僧たちを描いた原画はシーボルトの手許にあったが、現在は一部がライデンにあり、一部はミュンヘンにある。コレクションが分散したことによる。九大本と福岡県立図書館本の彩色は、真言僧の袈裟の色合いが違うが、他はほぼ同じ彩色である。福岡県立図書館本にみられる袈裟の色合いは、OAG本にもあり、他は九大本のように赤い。

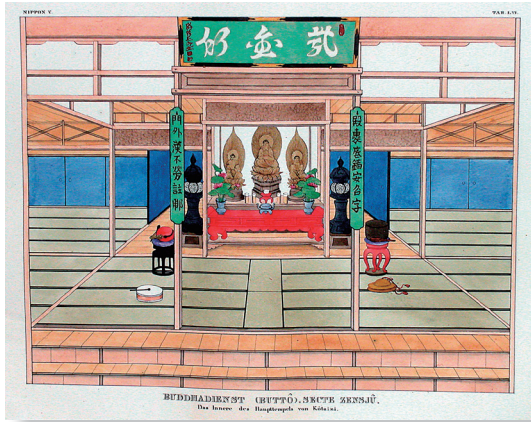
〔317〕「仏教 巡礼・山伏・^{にそう}尼僧と童女・大黒舞という^{こじき}乞食」は、右上が巡礼者で、^{きやはん}脚絆をつけ手に杖と数珠をもつ。左上が旅装束の山伏、仏具や衣服をいれた^{おい}笈を背負う。左下が尼僧とやがて尼僧になる童女、右下の2人が大黒舞と呼ばれる^{ずきん}乞食。頭巾や仮面をかぶって大黒天に扮装し、門前で歌をうたい三弦を弾いて米錢を乞う。どの『NIPPON』もほとんど相違はなく、かなり均質な彩色となっている。

以上、第10回配本で出された8枚の色つき図版は大きく2つに分類できる。4枚の寺院本堂図はどれも色ムラが目立ち、彩色した人々のレベルはあまり高くない。これに対し、僧を描いた4枚の図版ははるかに丁寧で均質な彩色であり、別グループの人々が担当している。前回の第8・9回配本において、「雑」な彩色図版がいくつかあったが、寺院図はそれと同じ人々が彩色したように思われる。

〔注〕

- (1) 講談社が『NIPPON』を復刻する際の広告による(東洋文庫蔵)。トラウツ版は200部限定であり、講談社復刻版は485部(国内400部)を75万円で販売する、とある。
- (2) 『オランダ国立ライデン民族学博物館 シーボルト・コレクション 秘蔵浮世絵』解説書、講談社、1978年。

[301] NIPPON V 第56図 仏教 皓台寺本堂の内部

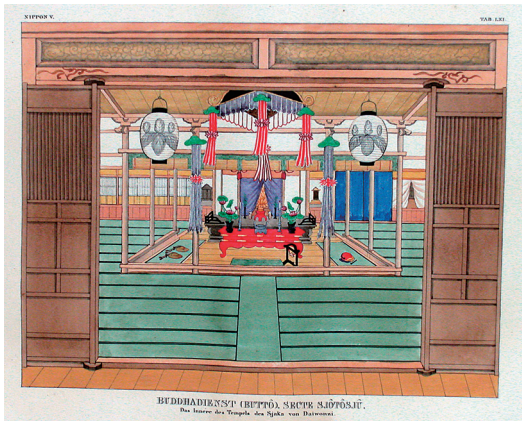


九大本

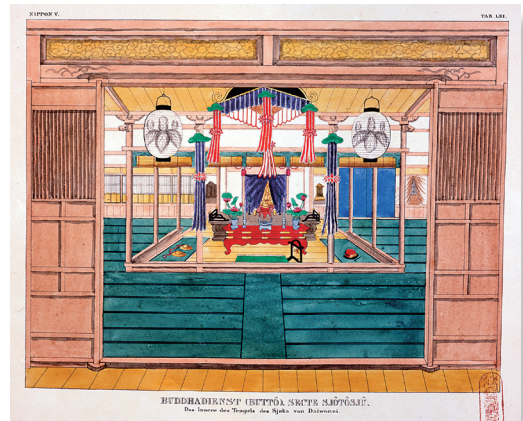


福岡県立図書館本

[306] NIPPON V 第61図 仏教 浄土宗 大音寺釈迦堂 内部

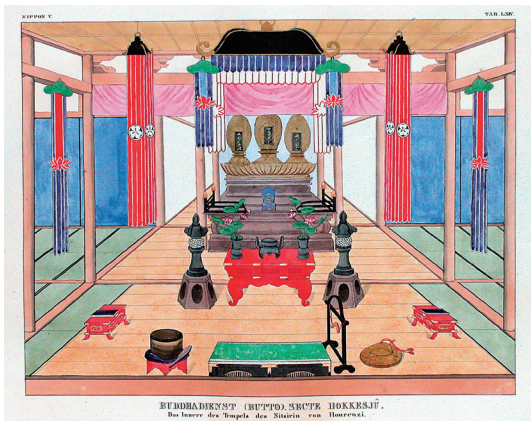


九大本



福岡県立図書館本

[310] NIPPON V 第64図 仏教 法華宗 本蓮寺の堂内

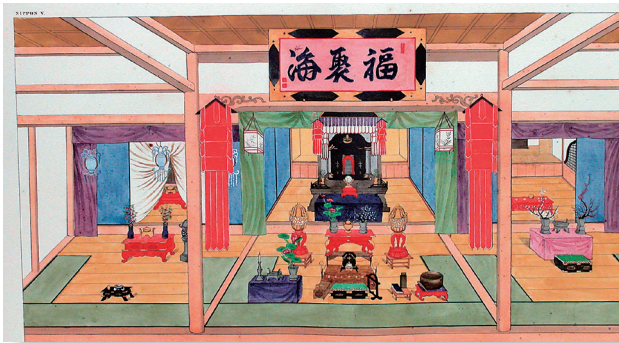


九大本



福岡県立図書館本

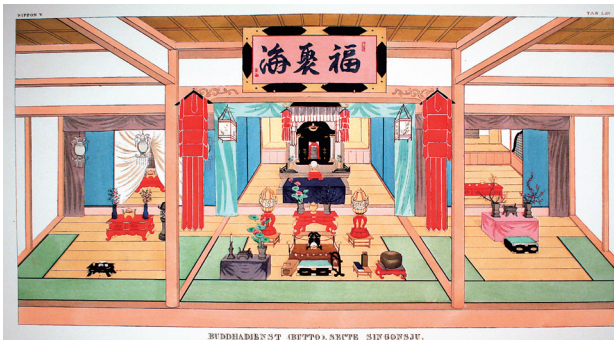
[311] NIPPON V 第65図 仏教 真言宗 大徳寺観音堂 内部



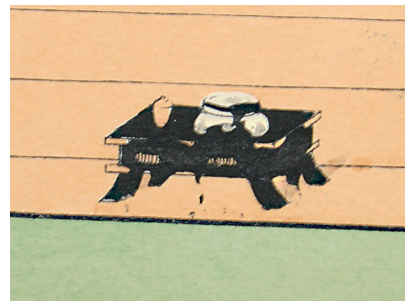
九大本



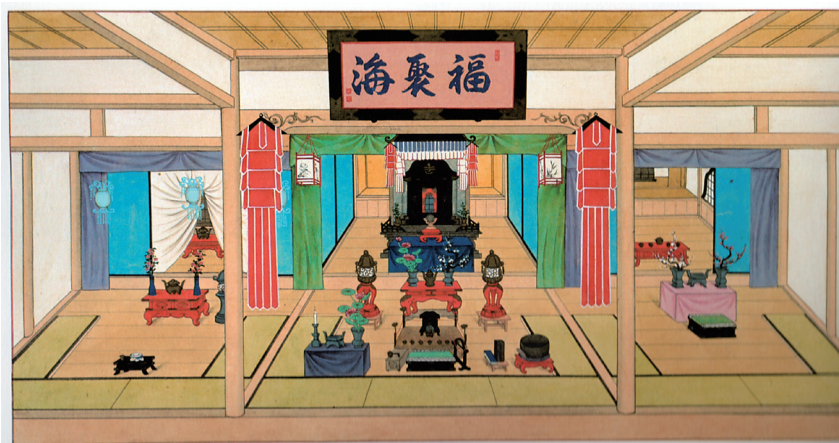
福岡県立図書館本



トラウツ復刻版



部分拡大, トラウツ復刻版



原画：ライデン国立民族学博物館 蔵

[313] NIPPON V 第67図 神道と仏教 神主・山伏



九大本



福岡県立図書館本



原画：ライデン国立民族学博物館 蔵

[315] NIPPON V 第69図 仏教 禅宗・浄土宗・一何宗の僧



九大本



福岡県立図書館本

[316] NIPPON V 第70図 仏教 法華宗・真言宗の僧 勧進僧 盲僧



九大本



福岡県立図書館本



原画：ライデン国立民族学博物館 蔵



『人物画帳』
ミュンヘン国立民族学博物館 蔵

[317] NIPPON V 第71図 仏教 巡礼・山伏など



九大本



福岡県立図書館本

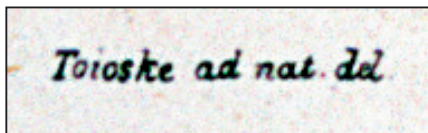
[7] 第11・12回配本の色つき図版

第11回配本は合併号でなく、15分冊が出た。本文は「NIPPON II」の江戸参府の後半部分であり、具体的には下関から瀬戸内の室^{むろ}までの記述であった。結局、その後の江戸までの旅行記は出なかったが、東洋文庫『江戸参府紀行—ジーボルト—』(斉藤信訳、平凡社、1967年)には江戸滞在の様子、長崎への帰路に至る記述がある。室以降の紀行文は、シーボルトの息子たちが編纂した第2版『NIPPON』(1897年、明治30年)に含まれるのであり、初版『NIPPON』にはなかった。2版は、初版の内容が削除されたり、追加された部分が多く、内容的にも形態的にも異なる。室から先の記事は、アレキサンダーとハインリッヒが父シーボルトの原稿や日記をもとに修正・追加したものである(1)。

初版で出された図版数は20枚、そのうち17枚は下関から江戸の永代橋^{えいたいばし}に至る街道筋の風景、3枚は「NIPPON VI」の産業に関する狩猟・漁業・捕鯨を描いた図版であり、彩色されたものは一枚もない。

第12回配本も合併号でなく、16分冊を出す。本文は「NIPPON VI」の産業・貿易についてであったが、配られた図版20枚は「NIPPON II」の日本人の容貌や家具を描いた16枚、「NIPPON III」の貨幣図2枚であり、「NIPPON VI」については農村風景を描いた2枚のみで、本文と関係する図版はほとんどない。彩色された画は日本人の容貌を描いた2枚である。

{51}・{52}「国民の容貌」は、ともに原画は川原慶賀(登与助)であり、左下に「Toioske ad nat. del」とある。ライデンにも、ミュンヘンにも原画そのものは見出していないが、慶賀の人物画をもとにエルクスレーベンが石版画にした。



彩色の仕方は、九大本・福岡県立図書館本、その他の『NIPPON』においても多少の色合いの違いはあるが、ほぼ均質である。これまでの合併号や合併配本では多量の彩色図版を配らねばならず、色ムラのあるものがあつたが、12回配本は初期の配本のように1分冊となつてお

り、丁寧な彩色が行われた結果だと考えられる。

〔注〕

(1)シーボルトの自筆『1826年の参府旅行中の日記』は、斎藤信『シーボルト参府旅行中の日記』(思文閣出版、1983年)で訳出されている。

[51] NIPPON II 第17図(a) 国民の容貌



九大本



福岡県立図書館本



シーボルト記念館本



シーボルト記念館本

[52] NIPPON II 第18図(a) 国民の容貌



九大本



福岡県立図書館本

[8] 第13回配本(1851年)の色つき図版

第13回配本は1851年に17～20分冊の4号合併で出た。本文は「NIPPON I」「NIPPON V」「NIPPON VI」「NIPPON VII」の各章にまたがっており、それまでに出ていない部分が補充された。図版数は66枚(うち2枚の地図は同一紙に印刷されている)、約半分の31枚は『仏像図彙』を写した仏像図である。『仏像図彙』とは、土佐将曹紀秀信の筆になる仏像画集で、800をこえる図を収め簡単な解説を加えたものである。初版は元禄3年(1690)であり、その後増補され何度も版を重ねた。シーボルトが持ち帰ったのは寛政8年(1796)刊『増補諸宗 仏像図彙』5冊であり、今はライデン大学図書館にある。

13回配本の配本目録「INHALT」には、「im September 1851.」と日付されたシーボルトの報告がある。それには、本文と図版のズレ・欠落したページや図版に対する苦情への返答が書かれている。シーボルトはあと2回の配本で終わること、1852年中に刊行すること、図版と本文との間に「系統的な秩序」をつけること約束しているが、それは実現できなかった。1851年の第13回配本の後、「琉球諸島」等に関する本文が1857～58年頃に出たというが、九大本は13回配本で終わっている。

図版66枚のうち、彩色されたものは蝦夷・樺太の習俗を描いた4枚にすぎない。4分冊の合併号であるから、それまでの例からすると、もっと多くの彩色図版が出されるべきだが、意外に少ない。

蝦夷・樺太に関する『NIPPON』の本文は、間宮林蔵『東鞆地方紀行』・『北夷分界余話』の翻訳である。シーボルトは本文の注記で次のように記している(1)。

彼(間宮林蔵)は『東鞆紀行』(To-tats ki ko)すなわち東部タタリア地方への旅として書きしるし、旅した土地に関して多くの写生や地図を付し、その写本を江戸の幕府文庫に収めた。ヨーロッパの航海家もほとんど訪れたことのない樺太島やあまり知られていない黒竜江地方の土地や住民についての貴重な情報が、われわれの1826年江戸滞在のおり、幕府お抱えの天文学者高橋作左衛門によって知らされ、その後、われわれの日本の友人J.Ts[吉雄忠次郎]の仲介でその写本を手に入れることができた。しかし残念なことに、1829年の幕府による取調べの際、われわれに連座する日本の友人を救うために、この写本と付録の写生画を

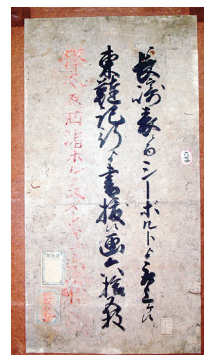
長崎奉行に渡すはめになった。幸いにも、当地の学者J.Tsのはからいで、写本の翻訳書と写生画の数枚は手放さずにすんだ。これらは、われわれの『NIPPON』に若干の写生画と注釈を付して解説する。

『北夷分界余話』は文化5年7月～8月、間宮林蔵・松田伝十郎による第1次樺太調査の記録であり、アイヌ・スメレンクルなどの習俗を記述する。『東鞆地方紀行』は、間宮林蔵が文化6年(1809)1月から8月末におよぶ第2次樺太・山旦(黒竜江下流地方)調査記録であり、樺太半島説を排し、サハリンと樺太が同一であることを指摘したものである。流布本が『東鞆紀行』として知られる。この両書は、文化7年に間宮林蔵が口述した内容を松前奉行配下の村上貞助が筆録したもので、翌8年に浄書して幕府に献上した。シーボルトも「幕府文庫」にあると述べており、現在は国立公文書館に所蔵されている(ともに重要文化財)。

シーボルトは上の注記のなかで『東鞆紀行』と記しているが、『NIPPON』には『東鞆地方紀行』・『北夷分界余話』の両書が翻訳され、挿絵は『北夷分界余話』から採用されている。彼は、天文方兼御書物奉行の高橋作左衛門(景保)の案内で、「幕府文庫」の「紅葉山文庫」を密かに訪れたとき(2)、伊能忠敬の日本図の他にこれらの写本も要求したのである。写本を作成したのは、高橋とシーボルトの間の通訳を務め、天文方の翻訳方であった吉雄忠次郎であった。

間宮の報告書は吉雄が翻訳を担当したが、写生図は彼でなく、川原慶賀が作成している。

上の注記にある長崎奉行に提出したという写生図は、現在、東京国立博物館に所蔵されている。それは『樺太風俗図』と題され、縦約35cm×横約43.5cmのオランダ紙に彩色された65枚の絵が収められている。表紙内側の貼り紙には、長崎でシーボルトから取り上げたことが記されている。『樺太風俗図』の貼り紙慶賀は、文政9年、シーボルトとともに参府しており、シーボルトが高橋景保や最上徳内らと会う際に同席して細部にわたる描写や風俗について説明を受けたと考えられ



ている(3)。慶賀が描いた65枚のアイヌ習俗画は幕府へ差し出されたが、いくつかはシーボルトの手許に残っており『NIPPON』に掲載された。現在、その一部はライデン国立民族学博物館に残る。

〔352〕「蝦夷(宗谷岬) アイヌとその住居」は、宗谷岬のアイヌとその住居を描く。ライデン国立民族学博物館のシーボルト・コレクションに長さ16m・幅30cmの『蝦夷風俗図巻』の絵巻があり、後景の人物図が部分的に利用されている。『蝦夷風俗図巻』の作者は、蝦夷地松前在住の春里こと伊藤与昌。落款に「松前 春里画」とあり、「松前」は姓でなく、「松前の住人」という意味である。彼は「藤原」「与昌」「伊藤与昌」「鳳鳴与昌」などの印を用い、ときに「鳳鳴」と署名する。生没年を含め画歴など未詳である(4)。他に川原慶賀が模写したアイヌ人物図も組み込まれている。『NIPPON』の彩色については、細かい部分での違いはあるが、大きな違いはない。

〔353〕「蝦夷(松前) アイヌのオムシャ祭り」は、祭壇に生贄の熊を飾り、演舞している図であり、「イオマンテ」(熊祭り)である。タイトルに「オムシャ OMSIA」とあるが、誤りである。「オムシャ」は蝦夷地各場所でも出先役人に対する拝謁礼のこと、松前藩主への謁見礼は「ウイマム」という。この原画はライデン国立民族学博物館にあり、「千嶋春里」の署名と「藤原」「与昌」の印があり、『蝦夷風俗図巻』と同一人物の作である。シーボルトは『NIPPON』の注記で、原画の入手経路について記している(5)。

松前の一日本人が描いたオムシャ祭りの絵を、われわれの友人ソシュロから手に入れ、Ⅶ第17図に模写した。蝦夷のアイヌ人はふつう、秋のある日にこの祭りをする。

「ソシュロ」とはオランダ通詞の馬場佐十郎であり、彼が文化9年(1812)に松前へ出向した際に入手したものである。同じ作者の『蝦夷風俗図巻』も馬場佐十郎を経由してシーボルトの手に渡ったと考えられる。シーボルトはこの画を川原慶賀に描き直させている。それはライデン国立民族学博物館に残っており、下部にあるタイトルにシーボルトの筆跡で「Omsia」と記されている。この時点で間違ったようである。彩色については、慶賀の画に比べて、ゴザの色合いが違うが、かなり忠実に彩色されていることがわかる。他所の『NIPPON』の彩色もほぼ同じである。

〔354〕「蝦夷(松前) アイヌが貢物や商品を運ぶ」は、「ウイマム」のために松前へやってきたアイヌが、後景にある船から仮設小屋に品物を運び込む図であり、原画は『蝦夷風俗図巻』のなかの一場面である。『NIPPON』の彩色は、小屋のなかの子供のイヤリングを赤色で塗る長崎歴史文化博物館本・慶応大学本と、そうでないグループに分けられるが、大きな差はない。

〔356〕「樺太 オロッコとスメレンクル」は、北カラフトに住むオロッコとスメレンクル(ギリヤーク)の風俗を、間宮林蔵の『北夷分界余話』の挿絵にもとづいて描いている。『NIPPON』によると、彼らはアイヌと異なり、言語も違うという。定住せずに群れをなして移動する彼らの習俗を描いたこの画の注記として、シーボルトは間宮林蔵のスケッチによったものと明記している(6)。前景のトナカイを引く2人がオロッコ人。トナカイは干した鮭と穀物、魚の皮製の覆いあるいは敷物を運んでいるという。後景の魚をもった男・揺り板に子供を乗せた婦人・獲物をもった漁師などはスメレンクル人であり、樺太のアイヌが建てるとような夏の住居を遠景に描いているという。

『北夷分界余話』全10巻を見ると、7・8巻にあるいくつかの挿絵を合体させていることがわかる。川原慶賀が描き直した画があったと思われるが、未だライデンでは見出ししていない。ただし、シーボルトが長崎奉行に提出した『樺太風俗図』のなかに、慶賀が描いた原画と見られるものが数点あるが、トナカイが描かれていなかったりしており、シーボルトは別の画を入手していたと考えられる。彩色についてはどの『NIPPON』もほぼ均質である。

以上、13回配本の彩色図版は4分冊の合併号であるにもかかわらず、4枚のみであり、初期の配本のように丁寧に彩色されており、差違はほとんどなかった。13回配本までに配られていない「京都の全景」・「江戸の全景」の図版を含むクオリッチ版『NIPPON』があるが、それらは白黒の石版画であり、彩色のある図版は今回が最後であった。

〔注〕

- (1)『シーボルト「日本」』6巻、13-14頁、雄山閣、1979年。
- (2)秦 新二『文政十一年のスパイ合戦』171-178頁、文藝春秋、1996年。
- (3)佐々木利和『アイヌ絵誌の研究』125-128頁、草風館、2004年。本書によると、慶賀が見たのは献上本でなく、高橋景保の手許にあった類本であったらしく、現在国立公文書館にある『北夷紀行』などがそれに類するという。
- (4)佐々木利和『アイヌ絵誌の研究』34-37頁。
- (5)『シーボルト「日本」』6巻、57頁、雄山閣、1979年。
- (6)『シーボルト「日本」』6巻、62頁、雄山閣、1979年。

[352] NIPPON VII 第16図 蝦夷(宗谷岬)アイヌとその住居



九大本



『蝦夷風俗図巻』, ライデン国立民族学博物館蔵

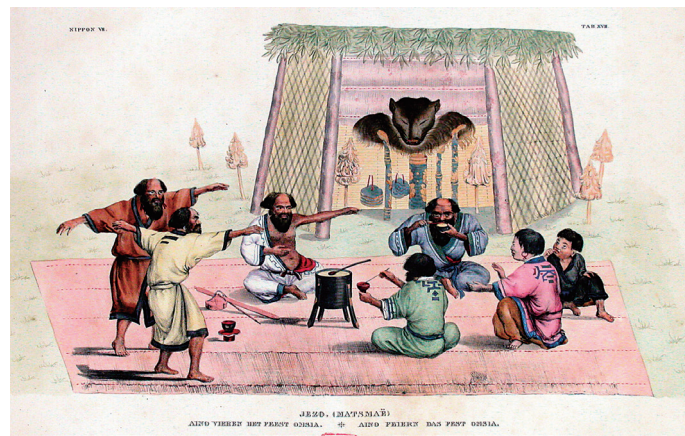


アイヌ人物図(男), 川原慶賀,
ライデン国立民族学博物館蔵



アイヌ人物図(男女), 川原慶賀,
ライデン国立民族学博物館蔵

[353] NIPPON VII 第17図 蝦夷(松前)アイヌのオムシャ祭り



九大本



アイヌ熊送りの図, 川原慶賀, ライデン国立民族学博物館蔵



熊送りの図, 千嶋春里, ライデン国立民族学博物館蔵

[354] NIPPON VII 第18図 蝦夷(松前) アイヌが貢物や商品を運ぶ



九大本



『蝦夷風俗図巻』, ライデン国立民族学博物館蔵

[356] NIPPON VII 第20図 樺太 オロッコとスメレンクル



九大本



『北東分界余話』7・8巻, 国立公文書館蔵

『樺太風俗図』, 東京国立博物館蔵

3.『日本植物誌』(Flora Japonica)と『日本動物誌』(Fauna Japonica)

シーボルトは2人の助手とともに『NIPPON』を執筆した。それは、郭成章とホフマンであり、郭成章は(中国)広東大埔県の人で乾坤草堂主人と号し、中国語・マレー語でシーボルトを助けた。シーボルトは来日する以前のジャワ島で郭成章を知り、そのまま日本・オランダでも彼を雇った。ホフマンはシーボルトと同郷の(ドイツ)ビュルツブルク生まれで、帰国後の1830年にアントワープのホテルでたまたまシーボルトと知り合い、その助手となる。美声の持ち主でオペラ歌手となることを志していたが、後にはライデン大学日本学講座の初代教授となり、多くの日本に関する著書・論文を発表する(1)。

これに対して、『日本植物誌』・『日本動物誌』ではそれぞれの専門家の協力があった。『日本動物誌』は、シーボルトが日本において採集した膨大な動物標本や川原慶賀などの日本人絵師が描いた下絵をもとに、ライデン国立自然史博物館のテンミンクやシュレーゲルらによって研究・執筆され、1833年から1850年にかけて5つの部に分けて分冊で刊行された。シーボルトは彼らに原稿料を払っており、『NIPPON』と同じく自費出版であった。シュレーゲルは3780ギルダーの原稿料をもらったと自伝に記している(2)。

鳥類(201種)	Aves	1844-1850	12分冊
魚類(330種)	Pisces	1842-1850	16分冊
甲殻類(182種)	Crustacea	1833-1850	8分冊
ほ乳類(63種)	Mammalia	1842-1844	4分冊
は虫類(両生類を含む27種)	Reptilia	1834-1838	3分冊

シーボルトの予定では、各分冊は図版10枚・本文3~4ページ、25分冊で完結の計画だったが、結局は43分冊となってしまう、無脊椎動物は甲殻類の部だけが完結し、その他は未完となっている。合計して313種が新種であり、日本を代表する動物がヨーロッパの学会に紹介された。ホンドタヌキ・ニホンオオカミ・ウグイス・メジロ・ヤマガラ・イシダイ・マダイなどが美しい手彩色の図版で記載されている。図版は主に標本にもとづいて作られているが、魚類編は川原慶賀の絵によっている。慶賀の絵は、現在でも図鑑の原画としてそのまま使用できるほどの精度で描かれている、という(3)。

『日本植物誌』は、シーボルトも著者の1人であった。当初、本文はミュンヘン大学の植物学教授ツッカーニーが分類学的所見をラテン語で書き、シーボルトはフランス語で植物の自生地・分布・栽培状況・日本名・利用法などを書いた。フランス語での記述は、広い範囲の読者を得るためであり、植物学者や園芸家の関心を引く観賞植物や有用植物を中心に紹介している。『日本植物誌』は2巻構成で、それぞれの巻に100枚の図版が含まれる予定であった。1巻の第1・2分冊は1835年にシーボルトによって刊行され、1841年に完結した。翌年には2巻の第1分冊が出たが、1844年に2巻の第5分冊を出した後に中断する。そして、シーボルトが死去した後の1870年にミクエルによって2巻の第6~10分冊が出た。

掲載された植物は140種、ウツギ・ウメ・アカマツなど52種は学会未知の新種だった。図版は植物標本や川原慶賀などの下絵をもとに、当代一流の植物画家たちによって石版に描かれ、手彩色が施されている。刊行には膨大な費用が必要であつと思われ、シーボルトは、園芸的価値のある野生植物が少なかったヨーロッパに日本の植物を導入するため、馴化植物園をライデンに開き、「シーボルト商会」を設立して園芸用の日本産植物の球根や苗・種子を販売した。筆頭は「カノコユリ」で、その球根は同じ重さの銀と取り引きされたといわれる。植物販売による利益は、膨大な出版費に充てられたと考えられるが、1844年以後は刊行を中断せざるを得ないほど、経済的に困っていた。そして1848年にツッカーニーも死去してしまい、『日本植物誌』はそのままとなっていた(4)。

『日本植物誌』・『日本動物誌』の初版本は数種類しか見ていないが、『NIPPON』の彩色図版と比べると、明らかに違う。とくに『日本植物誌』の図版は綺麗であるだけでなく、植物学的正確さにおいても優れ、出版当初から高い評価を得ていた。その図版の下部には一部を除き、画家と製版師の名前が明記されている。画家としてもっとも多くを描いたのは、ミンシンガー(Minsinger)であり、彼は当時全盛期だった他の著名な大型植物図譜の図版作成にも関与していたすぐれた植物画家であった(5)。植物の石版画を手彩色したのは誰なのか不明ながら、

『NIPPON』の彩色を依頼した人々とは大きく異なる。そのことは、シーボルトの日本妻の愛称をつけた「オタクサ(アジサイ)」と「カノコユリ」図版を拡大図とともに掲載しているので、明らかであろう。細部にいたるまで綺麗に、そして丁寧に手彩色されている。

〔注〕

- (1)板澤武雄「人物叢書 シーボルト」、吉川弘文館、1960年。
- (2) (3)山口隆男「シーボルトと日本の自然史研究」(『新・シーボルト研究』自然科学・医学編、八坂書房、2003年)。
- (4)大場秀章監修『シーボルト 日本の植物』(八坂書房、1996年)。大場秀章「シーボルトと彼の日本植物研究」・山口隆男「シーボルトと日本の自然史研究」(『新・シーボルト研究』自然科学・医学編、八坂書房、2003年)。
- (5)大場秀章監修『シーボルト 日本の植物』。

『日本植物誌』 **HYDRANGEA Otaksa** (アジサイ)



福岡県立図書館本



部分拡大(1)



OAG本 (色なし版)



部分拡大(2)

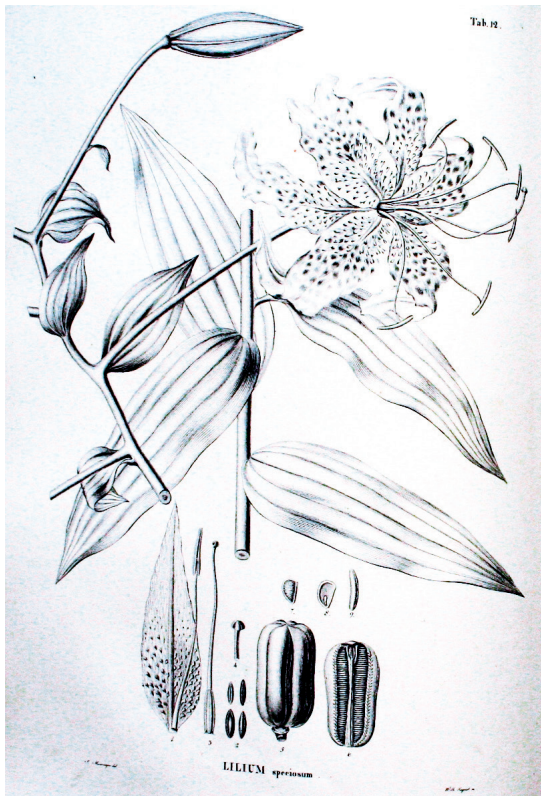
『日本植物誌』 *LILIUM Speciosum* (カノコユリ)



福岡県立図書館本



部分拡大(1)



OAG本 (色なし版)



部分拡大(2)

おわりに

シーボルトの代表作である『NIPPON』・『日本植物誌』・『日本動物誌』は、1832～35年にそれぞれの第1分冊がでた。豪華版の色つき版と廉価版の色なし版があり、色つき版は当時のヨーロッパで広く行われていた手彩色が施され、価格も非常に高価であった。彼は決して潤沢な出版資金を持っていたわけではなく、1834～35年には資金調達を兼ねてヨーロッパの宮廷を廻り、予約募集を行っている。どれほどの資金が集まったのか、出版の総費用はどれほどだったか不明であるが、彼は図版の彩色化をそれぞれに区別している。つまり、色の違いが重要な意味をもつ植物・動物画では、一流の人々に依頼して彩色させ、日本社会を描く『NIPPON』では二流、三流の人々に頼んでいる。それは出版経費の節約を考慮してのことであろう。『NIPPON』の第8回・9回配本、そして10回配本では色ムラの目立つ「雑」な彩色図版は少なくなかった。しかし、人物の服装の色合いが少し違っていただけとしても、日本社会を理解することの障害とはならなかったであろう。経費節減は、当然といえば、当然のことである。

現在でも、フルカラーの「論文」や「著書」はなかなか出すことができない。限られた資金をどの分野に集中して「いい本」を作るか、本論文でシーボルトの方針の一部を明らかにできたと思う。

『NIPPON』・『日本植物誌』・『日本動物誌』（福岡県立図書館蔵）





Dimorphism of Leaf Galls Induced by *Pseudasphondylia neolitseae* (Diptera: Cecidomyiidae) on *Neolitsea sericea* (Lauraceae) and Their Distributional Patterns in Kyushu, Japan

Misako MISHIMA* and Junichi YUKAWA*†

*The Kyushu University Museum, 6-10-1 Hakozaki, Fukuoka 812-8581, Japan

†Kyushu University, 6-10-1 Hakozaki, Fukuoka 812-8581, Japan

Abstract *Pseudasphondylia neolitseae* (Diptera: Cecidomyiidae) induces two different types of gall (upper and lower types) on the leaves of *Neolitsea sericea* (Lauraceae). In the upper type, the adaxial side of the gall projects more prominently than the abaxial side, and *vice versa* in the lower type. The lower type galls were found mainly in northwestern and northern Kyushu, while the upper type were found mainly in southwestern and southern Kyushu and their distributional patterns were parapatric with a little overlapping. The coexistence of both types on a single host tree was relatively rare. Whenever they coexisted on a single tree, they always appeared together on the same leaf, although the relative abundance of one type to another was biased toward one side. The ploidy level of host plants was not related to the gall types, because almost all host trees examined were diploid. Therefore, the gall types are not determined by the differentiation of ploidy level of host plant, and possibly determined by the gall midge. The parapatric distribution pattern of the two gall types may suggest that *P. neolitseae* is now entering into the initial stage of speciation, if gall dimorphism leads to reproductive isolation.

Keywords: Cecidomyiidae, distribution pattern, gall dimorphism, Lauraceae, *Neolitsea sericea*, *Pseudasphondylia neolitseae*.

Introduction

Galls have been defined as all manifestations of growth, whether positive or negative, and of abnormal differentiation induced on a plant by animal or plant parasites (Meyer, 1987). Cecidomyiidae (Diptera) includes the largest number of gall-inducing species among arthropod taxa containing gall inducers, and many gall-inducing cecidomyiids are monophagous or oligophagous within one or a few plant genera (e.g. Yukawa and Rohfritsch, 2005). Cecidomyiid galls are diverse as a whole in shape and galling position, but the appearance and structure of each cecidomyiid gall is specific to a gall midge species in many instances (e.g. Yukawa and Rohfritsch, 2005). In contrast, a few cecidomyiid species, such as *Masakimya pustulae* Yukawa and Sunose (Sunose 1985),

Hartigiola faggalli (Monzen) (Sato and Yukawa 2004), and *Pseudasphondylia elaeocarpini* Tokuda and Yukawa (Tokuda and Yukawa 2005), have been known to exhibit gall dimorphism (Yukawa and Masuda, 1996). *Pseudasphondylia neolitseae* Yukawa (Diptera: Cecidomyiidae: Asphondyliini) (Yukawa, 1974) is also known to induce two different types of gall (upper and lower types) on the leaves of *Neolitsea sericea* (Bl.) Koidz. (Lauraceae) (Yukawa and Masuda, 1996). In the upper type, the adaxial side of the gall projects more prominently than the abaxial side, and *vice versa* in the lower type (Fig. 1). Yukawa and Masuda (1996) briefly mentioned that the upper and lower types could be seen, respectively, in southern and northern parts of Kyushu, Japan.

We have been considering that the gall dimorphism is worth being paid attention as it may be a good model to

Correspondence : M. Mishima.
FAX : +81-92-642-4299
E-mail address: mishima@museum.kyushu-u.ac.jp

understand the significance of gall shape diversification in the process of gall midge speciation. As the first step, we tried to gather further information on distributional patterns of the two gall types induced by *P. neolitseae* in Kyushu and to examine whether or not host plant traits, such as the ploidy level, are related to the determination of gall types.

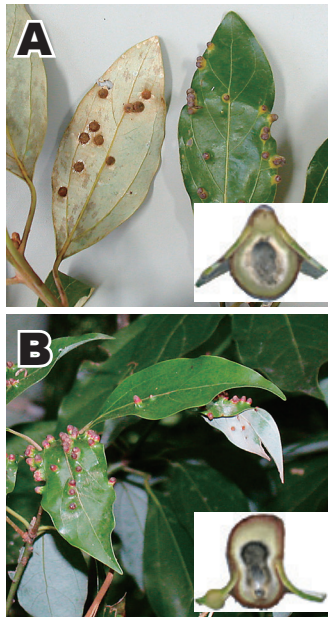


Fig. 1. Two gall types induced by *Pseudasphondylia neolitseae*. A: Lower type. B: Upper type.

Materials and Methods

Insect and plant materials

The host plant, *Neolitsea sericea*, is an evergreen tree of Lauraceae and widely distributed in Japan (Honshu, Shikoku, Kyushu, and the Ryukyus), southern Korea, and Taiwan (Momiya, 1989). In Kyushu, *N. sericea* is commonly seen everywhere except for higher mountains. *Pseudasphondylia neolitseae* is fundamentally univoltine and distributed in Honshu, Shikoku, Kyushu, and the Ryukyus, Japan (Yukawa, 1974; Tokuda and Yukawa, 2005). In spring, the females lay their eggs in the host buds one by one with the aciculate ovipositor. The first instars hatch several days after oviposition. The first signs of attack are small reddish spots on the upper surface of the fresh leaves. Later, apically rounded subconical swellings appear on the surface of the leaves accompanied by hemispherical swellings on the lower surface. The galls mature in early summer and each gall contains one midge larva (Yukawa, 1974; Yukawa and Akimoto, 2006).

Table 1. Localities from which *P. neolitseae* galls were collected, gall type, the ploidy level of *N. sericea*, and the number of host plants surveyed.

Number	Locality	North latitude	East longitude	Gall type	Ploidy level of host plant	Number of host plants surveyed
1	Fukuoka Pref.: Shikano-shima	33° 40' 00"	130° 18' 24"	Lower	no data	1
2	Ino 1	33° 40' 27"	130° 31' 12"	Lower	2x	1
3	Ino 2	33° 40' 41"	130° 32' 00"	Lower	2x	1
4	Motooka	33° 35' 55"	130° 12' 51"	Lower	no data	1
5	Kurōmaru	33° 34' 16"	130° 40' 37"	Lower	no data	6
6	Nijo	33° 32' 14"	130° 10' 01"	Lower	no data	1
7	Raizan	33° 28' 43"	130° 13' 24"	Lower	no data	1
8	Saga Pref.: Niri	33° 15' 35"	129° 50' 22"	?	2x	1
9	Hadatsu	33° 23' 39"	129° 52' 57"	Lower	no data	2
10	Yamauchi	33° 11' 53"	129° 56' 40"	?	2x	1
11	Kashima	33° 05' 14"	130° 07' 10"	Lower	2x	1
12	Kanzaki	33° 20' 45"	130° 22' 57"	Lower	no data	3
13	Taku 1	33° 17' 23"	130° 08' 11"	Lower	no data	2
14	Taku 2	33° 17' 29"	130° 08' 21"	Lower	no data	1
15	Kagami	33° 25' 57"	130° 00' 34"	Lower	2x	1
16	Takekoba	33° 25' 36"	129° 55' 29"	Lower	2x	2
17	Karakawa	33° 24' 53"	129° 54' 40"	Lower	2x	1
18	Ureshino	33° 04' 40"	129° 58' 49"	Lower	no data	3
19	Oita Pref.: Usa 1	33° 17' 38"	131° 27' 30"	Lower	2x	1

Table 1. Continued

Number	Locality	North latitude	East longitude	Gall type	Ploidy level of host plant	Number of host plants surveyed
20	Usa 2	33° 30' 25"	131° 19' 59"	Lower	no data	1
21	Hatake	33° 09' 39"	131° 46' 37"	Lower	2x	1
22	Usuki	33° 05' 09"	131° 43' 49"	Upper	2x	2
23	Kokonoe	33° 13' 42"	131° 12' 40"	Lower	2x	1
24	Nozuhara	33° 10' 28"	131° 32' 39"	Lower	no data	1
25	Oita	33° 13' 16"	131° 45' 18"	Lower	no data	5
26	Mie	32° 59' 06"	131° 36' 04"	Upper	no data	5
27	Ohara	32° 56' 40"	131° 35' 18"	Upper	2x	1
28	Asaji	33° 00' 33"	131° 28' 52"	Upper	2x	1
29	Moriya	32° 59' 08"	131° 25' 40"	Upper	no data	1
30	Oritate	33° 00' 40"	131° 21' 35"	Upper	no data	1
31	Yonai	32° 59' 17"	131° 22' 35"	Upper	no data	2
32	Matsutani	32° 56' 40"	131° 35' 28"	Upper	2x	5
33	Nagayu	33° 02' 17"	131° 21' 38"	Upper	no data	1
34	Nagano	33° 03' 40"	131° 21' 42"	Upper	2x	1
35	Kuju	33° 13' 42"	131° 12' 40"	Upper	2x	1
36	Yoake	33° 19' 20"	130° 51' 54"	Lower	2x	3
37	Hita	33° 19' 56"	130° 53' 38"	Lower	no data	1
38	Beppu	33° 17' 38"	131° 27' 30"	Upper	2x	2
39	Kumamoto Pref.: Kugino	32° 49' 25"	131° 01' 34"	Lower	2x	2
40	Ueshikimi	32° 51' 25"	131° 09' 50"	Upper	no data	1
41	Takamori naka	32° 49' 00"	131° 07' 24"	Upper	2x	1
42	Takamori soto	32° 49' 00"	131° 07' 24"	Lower	3x	1
43	Naganohara	32° 47' 22"	131° 13' 16"	Upper	2x	2
44	Nagano	32° 53' 32"	131° 01' 09"	Upper	2x	1
45	Kawayou	32° 52' 25"	131° 00' 14"	Lower	2x	1
46	Minamioguni	33° 05' 42"	131° 04' 42"	Upper	2x	1
47	Sihrakawa	32° 49' 29"	131° 05' 40"	Upper	2x	1
48	Ohgouchi	32° 14' 48"	130° 29' 34"	Upper	no data	1
49	Tobase	32° 35' 48"	130° 29' 32"	?	no data	1
50	Misumi	32° 36' 57"	130° 30' 22"	Lower	no data	1
51	Tsubaki	32° 35' 44"	130° 48' 55"	Upper	no data	1
52	Toyono 1	32° 37' 58"	130° 44' 13"	Lower	2x	1
53	Toyono 2	32° 37' 37"	130° 44' 14"	?	2x	1
54	Shabagami-toge	32° 37' 21"	130° 44' 06"	Upper	2x	2
55	Haizuka	32° 51' 54"	130° 51' 34"	Lower	2x	1
56	Takaono	32° 53' 31"	130° 54' 24"	Lower	2x	1
57	Hitoyoshi	32° 13' 52"	130° 46' 04"	Upper	2x	2
58	Nankan	33° 04' 13"	130° 32' 46"	Lower	2x	1
59	Togigawa	32° 45' 33"	130° 48' 59"	Lower	2x	2
60	Takigawa	32° 44' 33"	130° 47' 07"	Lower	no data	1
61	Mifune	32° 45' 19"	130° 54' 49"	Upper	2x	1
62	Yabe	32° 40' 27"	130° 58' 53"	Upper	no data	1
63	Ego	32° 33' 48"	130° 24' 38"	Lower	no data	1
64	Fukuro	32° 09' 49"	130° 22' 31"	Upper	no data	2
65	Sushi	32° 30' 41"	130° 19' 55"	Lower	no data	2
66	Sakamoto	32° 24' 24"	130° 37' 27"	Upper	2x	1
67	Miyanjo	32° 29' 47"	130° 38' 21"	Upper	no data	1
68	Yatsushiro	32° 31' 24"	130° 39' 39"	Upper	no data	1
69	Kimigafuchi	32° 24' 27"	130° 33' 18"	Upper	2x	2
70	Shiranui	32° 39' 04"	130° 39' 38"	Lower	no data	1
71	Hondo	32° 27' 43"	130° 10' 57"	Upper	no data	1
72	Nagasaki Pref.: Iki	33° 44' 38"	129° 46' 37"	Lower	no data	1

Table 1. Continued

Number	Locality	North latitude	East longitude	Gall type	Ploidy level of host plant	Number of host plants surveyed
73	Egami	33° 06' 14"	129° 46' 10"	Upper	2x	2
74	Sasebo	33° 11' 38"	129° 43' 16"	Upper	2x	2
75	Imafuku	33° 20' 45"	129° 47' 10"	Lower	2x	1
76	Nagasaki	32° 45' 17"	129° 52' 37"	Upper	no data	1
77	Mayuyama	32° 46' 09"	130° 20' 14"	Upper	no data	1
78	Higashisonogi	33° 02' 48"	129° 55' 40"	?	no data	1
79	Kushiyama	32° 39' 53"	130° 09' 01"	Upper	no data	1
80	Hirado	33° 22' 35"	129° 33' 15"	Lower	2x	1
81	Tanomoto1	33° 16' 35"	129° 41' 21"	Upper	2x	1
82	Tanomoto2	33° 16' 35"	129° 41' 21"	Lower	2x	2
83	Ikitsuki-shima	33° 23' 02"	129° 25' 03"	Lower	2x	1
84	Fukushima	33° 22' 59"	129° 50' 58"	Lower	no data	1
85	Konpira	32° 49' 24"	130° 05' 37"	Upper	no data	1
86	Matsuri	32° 45' 33"	129° 56' 39"	Upper	no data	1
87	Tsunaba	32° 45' 33"	129° 56' 39"	Upper	no data	1
88	Doisaki	32° 56' 49"	130° 12' 07"	Upper	no data	1
89	Miyazaki Pref.: Kainohatake	32° 34' 08"	131° 35' 44"	Upper	no data	5
90	Kobayashi	31° 58' 52"	130° 56' 10"	Upper	2x	2
91	Takachiho	32° 46' 08"	131° 16' 54"	Upper	no data	2
92	Shiitani	32° 41' 32"	131° 19' 33"	Upper	no data	3
93	Kagoshima Pref.: Noma-dake	31° 24' 05"	130° 09' 31"	Upper	no data	1
94	Sata	31° 01' 29"	130° 40' 53"	Upper	no data	1
95	Miyanjo	32° 03' 73"	130° 24' 46"	Upper	no data	1
96	Ibusuki	31° 17' 10"	130° 36' 04"	Upper	no data	1
97	Nagashima 1	32° 07' 20"	130° 07' 54"	Upper	no data	1
98	Nagashima 2	32° 08' 34"	130° 07' 05"	Upper	no data	1
99	Ohkubo	32° 08' 30"	130° 07' 28"	Upper	no data	2
100	Takarabe	31° 40' 59"	130° 56' 21"	Upper	2x	2
101	Ichiki	31° 40' 14"	130° 19' 49"	Upper	2x	2
102	Hinokami	31° 15' 16"	130° 16' 30"	Upper	no data	1
103	Tanegashima	30° 37' 45"	130° 58' 47"	Upper	no data	1
104	Yakushima	30° 18' 53"	130° 35' 99"	Upper	no data	1

Field survey and specimen acquisition

We searched for *N. sericea* trees that bore galled leaves at various localities in Kyushu in 2003, 2004, and 2005, and collected fully developed galls from a total of 104 localities during the season from October to April (Table 1). Each collection site is shown in Fig. 2 as a circle with a numeral that indicates the name of each locality in Table 1. We distinguished the two gall types from each other by their appearance. In some cases, galls exhibited an intermediate shape between the upper and lower type galls. We treated such galls as the intermediate type. The galls collected were fixed in FAA (5% formaldehyde, 5% acetic acid, and 60% ethanol) solution as voucher speci-

mens. Plant voucher specimens were collected from the same plant individuals that bore the galls. All voucher specimens will be deposited to the Kyushu University Museum.

Geographical information and map description

All localities were georeferenced by a handy GPS or map reading service provided by the Geographical Survey Institute of Japan (<http://watchizu.gsi.go.jp/>). Geographical Information System (GIS) was applied for all map description using ArcGIS (ESRI, Japan).

Flow cytometry

The ploidy level of individual host plants was determined with a flow cytometer as follows. Each fresh ungalled leaf of *N. sericea* removed from the respective plants was wiped with a sheet of wet paper. Then, leaf tip area with about 10mm×5mm was chopped up into small pieces with a razor blade in a 200µl solution A (Pertec) that was kept cool in a petri dish on ice. The solution, including extracted intact nuclei, was filtered through 30µm nylon mesh (Pertec) and then mixed with 1.5 ml of solution B (Pertec) including DAPI. The mixture was analyzed with PA (Pertec) and the ploidy level was determined by reading the peak position.

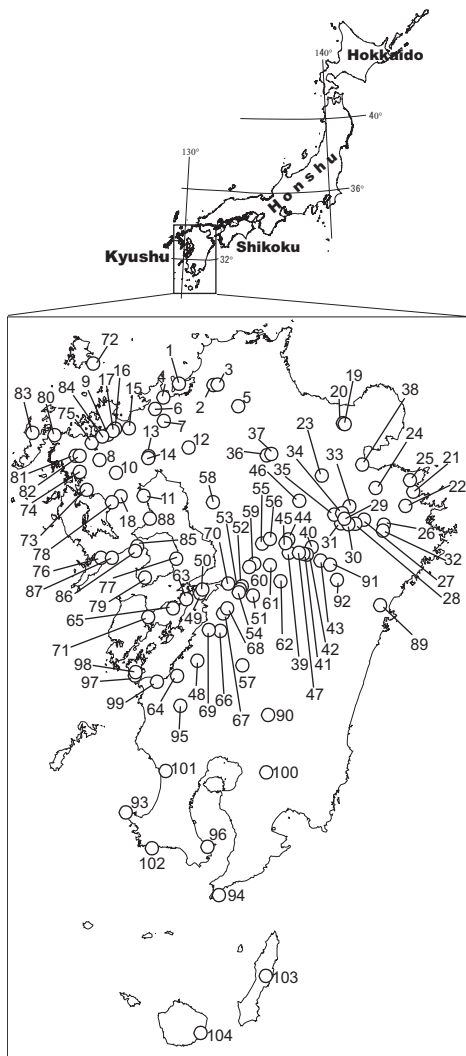


Fig. 2. Localities from which material was collected. Each locality is numbered for convenience of finding locations referred to in this paper (see also Table 1).

Results and Discussions

Distributional pattern of the two gall types

The lower type galls (Fig. 1-A) were found mainly in northwestern and northern Kyushu, while the upper type galls (Fig. 1-B) were found in southwestern and southern Kyushu (Fig. 3), as mentioned in Yukawa and Masuda (1996). In addition to the two gall types, we found the intermediate type of gall in three localities in northwestern Kyushu, and some inverted type of galls (Fig. 4-B) on a few occasions. As a whole, our data indicated that the two gall types were parapatrically distributed in Kyushu with a little overlapping.

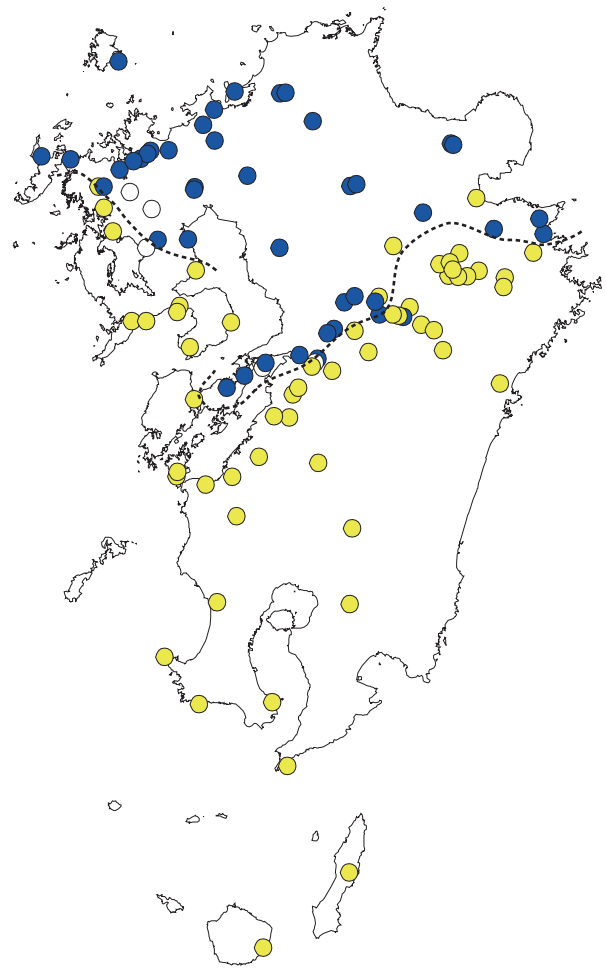


Fig. 3. Distribution map of two gall types induced by *Pseudasphondylia neolitsea* on the leaves of *Neolitsea sericea* in Kyushu. Yellow circle: upper type; Blue circle: lower type; White circle: intermediate type. Dotted lines show the rough borders of two gall types.

The two dividing lines could be drawn on the map to show the parapatric distribution pattern of the two gall types (Fig. 3). One line runs in northwestern Kyushu from the vicinity of Tanomoto (81, 82), Nagasaki Pref., through Ureshino (18), to Kashima (11), Saga Pref. Another line runs in central Kyushu from the Usuki (22), Oita Pref., through the southern foot of Mt. Aso (39-42, 47), to Toyono (52-54), Kumamoto Pref. At the western end of the latter line, the upper type galls replaced the lower type galls between Ue Island (65) and Shimo Island (71) of the Amakusa Islands.

Coexistence of the two gall types on a single tree

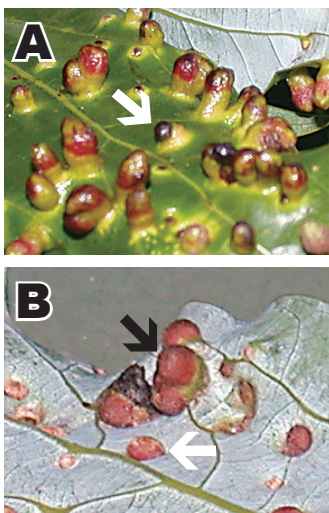


Fig. 4. Coexistence of two different gall types induced by *Pseudasphondylia neolitseae* on a leaf of *Neolitsea sericea*. A: Upper surface of the host leaf. White arrow points toward the upper part of a lower type gall that coexists with upper type galls. B: Under surface of the host leaf. White arrow points toward the lower part of a lower type gall that coexists with upper type galls. Black arrow points toward inverted type galls. The upper part of the inverted galls are projected to the under side of the leaf.

Usually the host trees bearing different gall types were growing several km apart from each other, but in a few cases they stood near by in Tanomoto (81 and 82) or within a distance of 20 m in Takamori (41 and 42). It might be possible for the females to fly for at least 20 m, but every host tree had either upper or lower type galls. The coexistence of both types on a single host tree was relatively rare. Whenever they coexisted on a single tree, the two types of gall always appeared together on the same leaf, although the relative abundance of one type to another was extremely biased toward one side (Fig. 4). Therefore, we have never seen any segregate utilization of leaves or shoots by the two different gall types. These observations may suggest that the coexistence of

the two gall types on a single leaf would be derived from oviposition by a single female, as has been observed by Yukawa et al. (1976) and Yukawa and Akimoto (2005). The minor gall type might be caused by some kinds of behavioral mistake by the gall midge or by generic variation during the process of gall induction.

Ploidy of host plants

All host plants examined were diploid, except one triploid individual. This result indicates that the ploidy level of host plants was not related to the types of gall. The triploid individual (Fig. 5) was found in Takamori (42), Kumamoto Pref. and seems to be a natural polyploid. It bore lower type galls, but we cannot conclude that triploid individuals always have lower type galls, because triploid individuals are very rare among wild *N. sericea* trees. We will report elsewhere more about the cecidomyiid galls induced on the triploid individual.

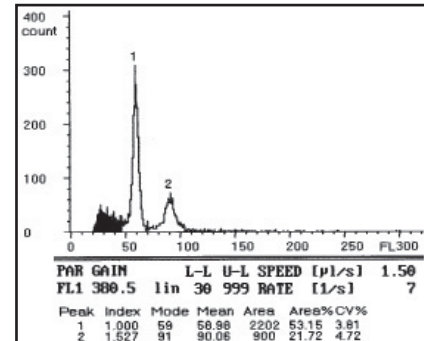


Fig. 5. Histograms showing DNA contents of diploid and triploid individuals of *Neolitsea sericea* that were analyzed with a flow cytometer. The numeral 1 indicates a peak of diploid and 2 indicates that of triploid.

Because the shape of galls is often specific to a gall-inducing species, the galls have been regarded as an extended phenotype of the gall inducers (e.g. Fukatsu et al., 1994; Stone & Schönrogge, 2003; Yukawa & Rohfritsch, 2005). Therefore, the parapatric distribution pattern of the two gall types may suggest that *P. neolitseae* is now entering into the initial stage of speciation, if gall dimor-

phism leads to reproductive isolation. In order to confirm such a hypothesis, we need to clarify the mechanism of gall shape differentiation. The mechanism is possibly related to behavioral traits of the gall midge, such as the position of egg-laying (upper or under surface of leaves that are folded in a host bud), the direction of the larval head to feed on upper or under surface of the leaves, and so on. In addition, intraspecific mating tests and comparison of DNA sequencing data are required between the two different populations. Then, we have to gather phenological data of gall midge emergence from different gall types to examine whether or not a chronological isolation mechanism is operating on the different populations.

Acknowledgements

We thank Dr. K. M. Harris (former Director of IIE, UK) for his critical reading of an early draft. Dr. T. Fujita, Dr. M. Nakazawa, Mr. S. Tagane, Mr. H. Tohyama, Mr. S. Watanabe, and Ms. Y. Watanabe helped us in collecting materials, to whom we are indebted. This research was partially supported by a Grant-in-Aid for Young Scientists (B) from the Japan Ministry of Education, Science, Sports, and Culture to MM (No. 15770059).

References

- Fukatsu, T., Aoki, S., Kurosu, U. and Ishikawa, H. 1994. Phylogeny of Ceratophidini aphids revealed their symbiotic microorganisms and basic structure of their galls: implications for host-symbiont co-evolution and evolution of sterile soldier castes. *Zoological Science*, 11: 613-623.
- Meyer, J. 1987. Plant galls and gall inducers. Gebrüder Borntraeger, Berlin, Stuttgart.
- Momiyama, Y. 1989. Lauraceae. In: Satake et al. (eds) Wild flowers of Japan, Woodyplants I. Heibonsha, Tokyo, pp. 113-125.
- Sato, S and Yukawa, J. 2004. Redescription of *Hartigiola faggalli* (Monzen) comb. n. (Diptera: Cecidomyiidae) inducing leaf galls on *Fagus crenata* (Fagaceae) in Japan. *Esakia* 44: 13-26.
- Stone, G.N. and Schönrogge, K. 2003. The adaptive significance of insect gall morphology. *Trends in Ecology and Evolution*, 18: 512-522.
- Sunose, T. 1985. Geographical distribution of two gall types of *Masakimyia pustulae* Yukawa & Sunose (Diptera, Cecidomyiidae) and reproductive isolation between them by a parasitoid. *Kontyû* 53: 677-689.
- Tokuda, M. and Yukawa, J. 2005. Two new and three known Japanese species of genus *Pseudasphondylia* Monzen (Diptera: Cecidomyiidae: Asphondyliini) and their life history strategies. *Annals of the Entomological Society America*, 98: 259-272.
- Yukawa, J. 1974. Descriptions of new Japanese gall midges (Diptera, Cecidomyiidae, Asphondyliidi) causing leaf galls on Lauraceae. *Kontyû* 42: 293-304.
- Yukawa, J. and Akimoto, K. 2006. Influence of synchronization between adult emergence and host plant phenology on the population density of *Pseudasphondylia neolitseae* (Diptera: Cecidomyiidae) inducing leaf galls on *Neolitseae sericea* (Lauraceae). *Population Ecology* 48: 13-21.
- Yukawa, J. and Masuda, H. 1996. Insect and mite galls of Japan in colors. Zenkoku Nôson Kyôiku Kyôkai, Tokyo.
- Yukawa, J. and Rohfritsch, O. 2005. Biology and ecology of gall-inducing Cecidomyiidae (Diptera). In: Biology, ecology, and evolution of gall-inducing arthropods. Eds. A. Raman, C.W. Schaefer, and T.M. Withers. Science publishers, Inc. Enfield (NH), USA. pp. 273-304.
- Yukawa, J., Takahashi, K. and Ohsaki, N. 1976. Population behaviour of the neolitsea leaf gall midge, *Pseudasphondylia neolitseae* Yukawa (Diptera, Cecidomyiidae). *Kontyû*, 44: 358-365.

和文要旨

シロダモタマバエ(双翅目:タマバエ科)によってシロダモ(クスノキ科)の葉に形成されるゴール2型と九州におけるそれらの地理的分布様式

三島美佐子*・湯川淳一*†

*九州大学総合研究博物館

†九州大学

(〒812-8581福岡市東区箱崎6-10-1)

タマバエ科のシロダモタマバエは、クスノキ科の常緑樹であるシロダモの葉にゴールを形成する。ゴールには2型があり、一方は葉の表面側がより突出しており(表型)、他方は葉の裏面側がより肥大している(裏型)。我々は、九州におけるそれぞれのゴール型の詳しい分布パターンを調べた。それぞれのゴール型はやや重なる側所的な分布域を持ち、九州北西部と中央部に2つの分布境界を持っていた。通常、1個体の寄主植物上には、どちらか一方のゴール型しか出現しないが、2型が共存している場合もあった。その場合は、同一葉上に一方の型が多数存在するなか、他方の型がわずかにみられるというものであった。同じ寄主植物上で、異なるシュートや葉を、どちらか一方の型のゴールが占めている状態で共存しているようなケースは、まったくなかった。調査したシロダモはほとんど2倍体で、1個体のみ3倍体であった。同じ倍数レベルのシロダモに、異なるゴール型が出現していることから、植物の倍数性は、これらのゴール型の決定には関与していないと結論づけられた。今回明らかになったゴール2型の側所的な分布様式は、タマバエの行動学的、生態学的、遺伝学的な違いが、2型の発現に何らかの形で関与した結果であると推察される。このことは、シロダモタマバエが種分化のきわめて初期の段階に移行しているという可能性を示唆しているかも知れない。

九州大学総合研究博物館研究報告第5号
平成19年1月発行

発行者 | 九州大学総合研究博物館
編集者 | 〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1
Phone / Fax 092-642-4252
URL <http://www.museum.kyushu-u.ac.jp>

印刷 | 浏上印刷株式会社 福岡支店
〒813-0034 福岡市東区多の津1丁目4番3号
Phone 092-621-1112 / Fax 092-621-1154

九州大学総合研究博物館研究報告

第5号
2007年1月

目次

宮崎 克則	1
シーボルト『NIPPON』の色つき図版	
三島 美佐子・湯川 淳一	57
シロダモタマバエ(双翅目:タマバエ科)によってシロダモ(クスノキ科)の葉 に形成されるゴール2型と九州におけるそれらの地理的分布様式	



九州大学総合研究博物館
Kyushu University Museum

九州大学総合研究博物館

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1 <http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/>